

# SLAVIC-EURASIAN RESEARCH CENTER NEWS

No. 172 July 2024

## 研究の最前線

### 2024 夏期国際シンポジウム 「新世界の坩堝? 20 世紀夜明けのロシア境界地域」開催される

7月18-19日に定例のスラブ・ユーラシア研究センター夏期国際シンポジウムが開催されました。ロシアによるウクライナ侵攻を受け、私たちは北ユーラシアの歴史について、これまでのロシア中心の見方を大幅に見直さなくてはならなくなりました。スラブ・ユーラシア研究センターはかねてより大国の研究というより、境界地域の研究に重点化し、その研究の国際的な進展をリードしてきたという自負があります。その意味で、国際情勢の変化によって、センターとして大幅な方針の転換が必要となったというわけではありませんでした。むしろ、いまこそ今までの蓄積を生かして、国際的にリーダーシップを発揮すべき時だとする意識がセンターにはありました。そこで今回は、中心と周縁の関係を主とする今までの「帝国論」を乗り越え、境界地域から出発し、中東欧から極東まで、境界地域をつなぐような、新しい北ユーラシアの歴史、新しい20世紀の「夜明け」を考えたいと思い、夏のシンポジウムを企画しました。

実際、この提案には、世界の第一線の中堅・若手の研究者が積極的に呼応し、海外から12名（2名はオンライン参加）、国内からは7名（うち海外研究者2名）が参加を



小樽での夕暮れ

表明してくれました。二日間にわたって、「伝統と近代化」「新しい文脈における民族問題」「グローバル化:社会・経済・インフラ」「抵抗、衝突、暴力」「ロシアの境界地域から世界へ」「新しい政治プロジェクト」などテーマ別に6パネル19本の報告がなされました。前日の17日には参加者の一人 Vladimir Hamed-Troyansky 氏のブック・トークが開かれました。さらにシンポジウム終了後の19日には、小樽へのエクスカージョンが行われ、北方世界の地域史を専門とされる菅原慶郎さん（東京理科大学）のご案内で小樽の総合博物館を巡るなど、ゲストの皆さんに北海道の歴史に親しんでもらいました。今回は対面のみでの開催となりましたが、会場への参加者は2日間の延べ人数で126名（うち外国人46名）に上りました。会場には多くの院生が訪れ、討論の際には質問するなど、議論にも積極的に参加していました。

会場での議論は、二日間、熱気を帯び、どのパネルも議論の時間が不足、会場の外でも意見の交換が続きました。企画するにあたって、歴史学としての専門性を高めるため、思い切って帝政最後の10年ほどに時代を限定することにしました。その一方、地域に関しては、フィンランド・ポーランド・バルト諸国・ベラルーシ・ウクライナ・モルドヴァ・コーカサス・ヴォルガ地域・中央アジア・極東と広く境界地域をカバーし、多様なアプローチで様々な角度から議論をしました。部族社会、宗教、民族、ナショナリティ、ジェンダー、言語、議会、市場とグローバル経済、海運、起業家、慈善活動、社会主義運動、アナーキズム、テロリズム、ユダヤ問題、コサック、大虐殺、移民、強制退去、大戦、帝国間の競合…ざっと挙げただけでも、数多くのトピックが取り上げられました。これらのトピックに沿い、文書館の調査の成果を出し合いながら、地域を横断して議論を重ねました。

議論の内容を少しだけ紹介してみましょう。「ロシアにおける colonial empire」「settler colonialism によって焦点化されるナショナリティの問題と、国際化するナショナリティ間の競合」「human mobility の高まりと情報拡散で引き起こされるパニック、それによって民族化する暴力」「ロシア帝国政府の臣民への不信と恐怖の源泉」「帝国官僚の改革の必要性の認識、その試みと失敗」「帝国市民形成の可能性」「文字・俗語・宗教とナショナリズム」「政策や実践の東西の相互参照（例えばイリミンスキー・システムは西で実践されたのか、など）」「新しいコンテキストにおける伝統社会の変容・再生」「地域主義とナショナリズムの相違」、歴史学の方法論としても「意図せざる結果、偶発的要素（では「意図された結果」とは何か？も含め）」「事例研究とグローバルなコンテキストの接合」「帝政期の資料の解釈、ソ連期の研究書・資料の再解釈・再利用」などなど…。どのペーパーも専門的で緻密に書かれており、さらにそれをディスカッサントが詳細に分析しつつ広い文脈に置き直すことで、フロアの議論へとつなげていきました。今後の歴史学の発展につながる、多様な観点、多様なアプローチが共有されたと思います。

境界地域とは、多様な人々が混交して居住する非画一性の領域であり、新しい政治・経済のフロンティアあるいは実験場であり、その一方で伝統社会が生命力を維持し近代化に独特な対応をしている世界であり、しかしながら流動性と可変性の空間であり、大国の競合と多様な人的集団の摩擦・衝突・暴力の場でもあります。これらは、ただ単に強大な帝国権力の政策に怯える地域であるどころか、統制に容易に服さず、独自の動きを示し、境界を軽々と超えて、それ自体で高いエネルギーを発しながら、世界を変えていくようなポテンシャルをもつ、魅惑的な「新世界の坩堝」だったのです。その意味で、むしろ帝国の中核の方が、常に境界地域に対する怖れを抱いていたのだとも言えるでしょう。

参加者からは、「誇張ではなく、このシンポジウムは、私がここ数年出席した会議の中で最も濃密で、知的好奇心を刺激する、充実したものだ」という感想をあちこちからもらいました。ニュースレターに書くには少し手前味噌かもしれませんが、SRC スタッフの見事な仕事ぶりに企画者自身が本当に感嘆しました。新しく私たちの仲間に加わってもらった、ヤスミナ・ガブランカペタノヴィッチ＝レジッチさん、松本祐生子さん、ヴィクトリア・アントネンコさんの尽力と対応の素晴らしさには、あらゆる面で助けられました。もはやベテランの感がある藤本健太朗さん、フレッシュな松本彩花さんにも現場を力強く支えてもらいました。そのほか、林健太さん、三栖大明さん、高橋稜央さん、長瀬篤音さん、ルスラン・シャクマトフさんをはじめとする会場スタッフの方、側面支援をしてくださった村上智見さん、諫早庸一さん、廣田千恵子さん、機器対応の山本大吾さん、事務の亀田望さん、URA の田宮彩也香さん、多くの方に、常に迅速にそして柔軟に対応していただきました。ゲストからは、シンポジウムの組織は、すべてがスムーズで「目を見張るほどだった」という感想を多くもらいました。今回のシンポジウムは大成功だったと胸を張って言えると思いますし、国際的な研究拠点の一つとしての存在感を示すことができたのではないかと考えていますが、それは何よりも SRC のチーム力のなせる業だったな、としみじみと思います。[青島]



7月19日、シンポジウムを終えて、皆晴れやかな笑顔

July 18, 2024

**9:20- 9:30 Opening Remarks**

**9:30-11:30 Session 1: “Tradition and Modernization”**

Tetsu Akiyama (Hokkaido University of Education) “Nomadic Central Asia Facing “the Age of Nationalism”: A Comparative Analysis of Qazaq and Qirghiz Elites”

Andrei Cusco (Romanian Academy) “The Orthodox Church, the National Question, and the Spectre of 'Separatism' in Early Twentieth-Century Bessarabia (1905-1914)”

Masumi Isogai (Chiba University) “Cooperation on the "Morality" of Muslim Women among Muslim Intellectuals and the Islamic Religious Administration in Russia”

Discussant: Jin Noda (SRC/Tokyo University of Foreign Studies) 【Online】

Moderator: Motoki Nomachi (SRC)

**13:00-15:00 Session 2: “Nationality Issues in the New Context”**

Darius Staliūnas (Lithuanian Institute of History) “Successes and failures of the tsarist nationality policy in the late imperial period (the case of Lithuania and Belarus)”

Yoko Aoshima (SRC) “Drifting Apart: Native Language Education Policies in the Polish and Baltic Provinces at the Beginning of the Twentieth Century”

Ivan Sablin (Heidelberg University/Institute of Contemporary History, Ljubljana) “Community Building in (Post)Imperial Parliaments: Buryat Deputies and Imperial Transformations”

Discussant: Tomohiko Uyama (SRC)

Moderator: Viktoriia Antonenko (SRC)

**15:30-18:00 Session 3: “Globalization: Society, Economy, Infrastructure”**

Jennifer Keating (University College Dublin) “Pastoralists, global markets and frictions of empire in early twentieth century Central Asia: A view from the Karkara valley” **[Online]**

Yukimura Sakon (Kyushu University) “The Arrival of Globalization in the Russian Far East: The Russian Empire and Traffic Changes on the Eve of World War I”

Anton Kotenko (Heinrich Heine University Düsseldorf) “Peripheral Modernity: The Image of Towns of the Western Borderlands as Hubs of Innovations, 1909–1914”

Akifumi Shioya (University of Tsukuba) “Khan, Entrepreneurs and Empire: Imperial Russian Development Projects in Khiva, 1908-1917”

Discussant: David Wolff (SRC)

Moderator: Jasmina Gavrankapetanović-Redžić (SRC)

July 19, 2024

**10:00-12:00 Session 4: “Protest, Conflict, Violence”**

Sarah Slye (Independent scholar) “Networks of Rebellion in the Caucasus, 1900-1916”

Anke Hilbrenner (Heinrich Heine University Düsseldorf) “About Jews and other anarchists: Terrorism in the southwestern borderlands of the Russian Empire and the revolution of 1905”

Stephanie Ziehaus (University of Vienna) “The Blagoveshchensk Anti-Chinese pogroms 1900 and beyond: the role of Baikal Cossacks in the Amur region”

Discussant: Norihiro Naganawa (SRC)

Moderator: Daisuke Adachi (SRC)

**13:30-15:30 Session 5: “From Russia's Borderlands to the World”**

Vladimir Hamed-Troyansky (UC Santa Barbara) “Muslim Displacement from Late Tsarist and Early Soviet Central Asia”

Roman Katsman (Bar-Ilan University) “Ukraine – Siberia – The Land of Israel: Avraham Vysotsky in 1908-1920”

Catherine Gibson (University of Tartu) “Bounds of Empathy: Intra-Imperial Humanitarianism in the Baltic Provinces”

Discussant: Taro Tsurumi (University of Tokyo)

Moderator: Akihiro Iwashita (SRC)

### 16:00-18:00 Session 6: “New Political Projects”

Wiktór Marzec (University of Warsaw) “Post-imperial Statehood and Interface Peripheries of the Russian Empire” 【Online】

Mirlan Bektursunov (Kyoto University) “Seeing Soviet Through Lineage: Kyrgyz Lineages and Early Soviet Rule”

Oleksandr Polianichev (Södertörn University) “A Ukrainianizing Empire? Tsarist Governance and “Little Russian” Patriotism in the North Caucasus, 1906–1917”

Discussant: Sayaka Kaji (Iwate University) 【Online】

Moderator: Hyunjoo Naomi Chi (Hokkaido University)

## 長縄宣博教授が大同生命地域研究奨励賞を受賞

センターの長縄宣博教授が、2024年度（第29回）大同生命地域研究奨励賞を受賞しました。大同生命地域研究賞は「地球規模における地域研究」に貢献した研究者を顕彰するもので、3つの部門のうち奨励賞は現在、「地域研究の分野において新しい展開を試みるとともに、今後さらに活躍が期待される研究者3名を表彰」するものとなっています。奨励賞という名前ではありますが、既に地域研究の第一線で活躍している研究者に与えられる賞です。センターでは、2010年度の宇山智彦教授に続く2人目の受賞となります。

受賞者の業績紹介の中では、ヴォルガ・ウラル地域のムスリム社会や初期ソ連時代の中東外交などをテーマとして、ロシアとイスラーム世界の交わる地域に関する帝国論的・社会史的研究を行い、単著のほか多くの国際学術雑誌で論文を発表していること、センターで「国際的な生存戦略研究プラットフォームの構築」の研究代表者を務めていること、スラブ・ユーラシア地域研究の国際的な文脈において、わが国の展開を強力に牽引する重要な役割を担っていることが評価されています。[編集部]

## 博物館展示「北大の探求心 2024」に参加しました

北海道大学総合博物館は、令和6年7月5日～8月12日（第1期）、8月20日～9月29日（第2期）まで、夏季企画展「北大の探求心 2024」を開催しています。第1期は北方生物圏フィールド科学センター、地球環境科学研究院、サステナビリティ推進機構 SDGs 事業推進部門に加え、スラブ・ユーラシア研究センターも展示を行っています。センターのコーナーでは、センターの沿革と研究活



スラブ研の展示物を説明する担当者

動の紹介に始まり、研究員が収集してきたスラブ・ユーラシア地域の理解が深まる興味深い工芸品や美術品が陳列されています。

今回の展示の焦点はスラブ諸語とその文字に当てられました。現在スラブ諸語の多くはキリル文字からラテン文字を使いますが、この展示ではキュリロス・メトディウス兄弟が9世紀に創出し、クロアチアでは20世紀初頭まで使われていたグラゴル文字、キリル文字による文芸の発展と文字形の変容、ラテン文字使用の歴史、ムスリムが使っていたアラビア文字、複数文字併用の歴史、スラブ人以外が用いたスラブ系の文字、現代によみがえる失われた文字など、現物や複製資料を用いて、スラブ人とその文字文化についてさまざまな角度から紹介しています。

あわせて、7月13日には第4回土曜市民セミナー「文字を通して見るスラブ人の世界」と題されたセミナーが行われました。展示物の内容に合わせて、講師は文字が音を書きとどめる機能だけではなく、文字そのものが文化伝統やアイデンティティを示す重要な役割があることを述べ、これについて現代における南スラブ人の「文字復興」の学術的な側面とマーケティングやブランディングといった実践的側面について解説しました。会場は満席近く、質疑応答も充実したものとなりました。

センターの笹谷めぐみさんがパネル作成、展示物の配置などを担当されました。この場をお借りしてお礼申し上げます。なお、展示物の一つに『オストロミール福音書』（1056-57）の複製版があります。筆者が3月下旬から6月上旬にオハイオ州立大学に研究滞在していたときに、スラブ歴史言語学者のダニエル・コリンズ先生に展示のことをお話ししたところ、「君との友情の証としてこれを贈ろう」と頂いたものです。ほんの軽い気持ちで頂戴したのですが、非常に大判の重い本で、帰国時にはスーツケースに入らず、手で持って運んだため、指がちぎれるかと思ったほどです。また、アラビア文字で書かれた南スラブ語の本2冊は、ボスニアのゼニツァに住むデザイナーのアミール・アル・ズビさんから提供されたものです。併せてお礼申し上げます。[野町]

## 第10回日韓共催シンポジウムの開催

昨年、北大で開催されたスラブ・ユーラシア研究センターとソウル大学ロシア東欧ユーラシア研究所との共催シンポジウムに続き、6月11日、「ユーラシアと東アジアにおける共存と相互依存」が、ソウル大学で開催されました。第10回という節目になるイベントで、センターからは岩下明裕、安達大輔の専任研究員と池直美共同研究員（公共政策大学院）が参加しました。

第1セッション「権力を取り囲む現代ロシア文化のダイナミクス」では、安達研究員が「戦争後のロシアのメロドラマ」について報告し、「痛みの映像化」の欠如がロシア・メロドラマの新傾向であると強調しました。

第2セッション「ロシア・ウクライナ戦争とユーラシアの難民たち」では、池研究員が「東アジアの難民たちの苦境：日本におけるウクライナ避難民」について報告し、日本の難民対策そのものの問題点、ウクライナとそれ以外の難民への対応の違いをとりあげ、これに対するクリティカルな分析を行いました。

2つのセッションの間には、岩下研究員が「ウクライナにおけるロシアの戦争と北東アジア地政治」という題目で特別講義を行いました。講演で提示された「韓国の制裁がなぜ日本

のそれと異なるのか」という論点に対しては、センターでもなじみのあるシン・ボムシク教授が特別コメンテーターとして、軍事支援を要請する米国に対する韓国のジレンマを詳しく説明しました。

韓国側からは、ナワリヌイへの支援活動がゴゴリの小説に由来しているとした「権威への抵抗における光の物語」という報告（第1セッション）、アルメニアやグルジアなどのロシア移民についての興味深い現地報告（第2セッション）があり、コメンテーターの顔ぶれも多彩で議論はおおいに盛り上がりました。

終了後は、天気もよく、ソウル大学キャンパスに設置されたビアガーデンで今後の両研究所・センターの協力について話が花が咲きました。大学間の枠組みを超えた今後の活発な共同研究が期待されます。[岩下]



両大学の顔ぶれ

## 第66回北大祭研究所・センター合同一般公開 「過去の記憶と現在（いま）：スラブ・ユーラシア」開催される

当センターでは6月8日（土）、第66回北大祭に合わせた施設一般公開「過去の記憶と現在（いま）：スラブ・ユーラシア」を開催いたしました。当日は天候にも恵まれ、昨年を上回る459名の方にお越しいただきました。

当センター4階の会場では、センタースタッフによる最新の研究成果に関するサイエンストークと、それに連動したパネル展・ドキュメンタリー映画上映会、カザフ刺繍の壁掛展、スラブ・ユーラシア地域の絵本・工芸品・民族衣装展示、各種体験コーナーなどを設けました。

今年度は戦争とジェンダーをテーマに、当センターのヤスミナ・ガブランカペタノヴィッチ助教が「スレブレニツァ虐殺をめぐ



サイエンストークの様子



カザフ刺繍と民族衣装コーナー

るジェンダー・記憶・暴力」、松本祐生子特任助教が「レニングラード包囲と戦後期の女性」と題しサイエンストークを行いました。ヤスミナ・ガブランカペタノヴィッチ助教は、民間人に対するジェンダー化された暴力の観点から、紛争後のボスニア・ヘルツェゴヴィナ社会の歴史のおよび社会的文脈におけるスレブレニツァ虐殺の位置を概観しました。松本祐生子特任助教は、包囲下と戦後のレニングラードにおける女性の経験をとりあげ、戦争が女性の身体にどのような影響をもたらしたのか、女性の日常生活に着目して、戦後の社会状況について考えました。合わせて67名が聴講し、来場者は熱心にトークに耳を傾け、多くの質問が寄せられました。終了後も質問に並ぶ人や、トークと連動したパネル展を見学する人々で賑わいました。

この他、ユーラシアの地図を学ぶことができる「スラブ・ユーラシア地図クイズ」、キリル文字を実際に書いて学べる「キリル文字ってどんな文字?」、伝統的な占いが体験できる「モンゴルのシャガイ（くるぶしの骨）占い」、カザフ刺繍体験や民族衣装体験コーナーなど、大人から子供まで楽しめるコンテンツを用意し、大いに盛り上がりました。アンケートではいずれも高評価をいただき、嬉しいご感想を多くいただきました。

ご来場いただきました皆さまと、会場スタッフとして尽力されたセンター教員・研究生・院生の皆さま、共催した8研究所・センターの皆様に心から感謝申し上げます。[村上]

## JCBS/UBRJ/RINGS セミナー 『『しま』を考える：共同体の想像と協働』参加記

2024年5月26日（日）、北九州市立大学北方キャンパスにて、NPO法人国境地域研究センター（JCBS）、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター境界研究ユニット（UBRJ）、名古屋外国語大学グローバル共生社会研究所（RINGS）、同世界共生学部世界共生学科の共催で、セミナー『『しま』を考える：共同体の想像と協働』が開催された。対面とZoomウェビナーとのハイブリッドで、合計40名ほどの参加があった。

赤星道子（JCBS 会員）の耳心地のよい司会と共に始まったセミナーでは、報告者2名が登壇をした。天野尚樹（山形大学）は、『『ヨリ島』は入っているか：奄美群島の構築と『愛される帝国』の創出』と題し、1972年の沖縄返還に先立つこと19年、1953年12月に日本への復帰を果たした奄美群島について、返還運動の中で沖縄と差異化することで構築されていった「奄美群島」の境界と共同体の想像プロセスについて論じた。黒石啓太（北九州市立大学）は、「島嶼自治体における住民・議会・行政」と題し、島嶼部での地方自治の歴史を紐解きつつ、政府による島嶼部に対する政策に対する島嶼自治体からのリアクションと今日における島嶼部自治の問題点について論じた。

その後、花松泰倫（九州国際大学）と地田徹朗（名古屋外国語大学）がコメンテーターとして入った。花松からは島嶼部の弱みを強みとして使う「したたかさ」について指摘し、「しま」というものを一つのユニットとして捉えてよいのかとの問題提起を行った。地田からは、「より島＝硫黄島」に住んでいた人びとの境界の捉え方、「県」や「ローカル」スケールでの「しま」の捉え方やそれらの主体性、元来移動する民であったはずの島嶼部の人びとの特性が「しま」への政府による政策や自治のあり方に影響を及ぼしたのか、といった点につい



て質問がなされた。オンラインを含むフロアからも数多くの質問がなされ、活発な議論が展開された。

このセミナーから、「しま」がもつアイデンティティ、そこでの地方自治や共同体のあり方、国に自らの独自の利害を訴えかけるしたたかさといったことから、独特な境界性のようなものが存在することが浮かび上がってきたと言えるのではないかと。セミナーを終えて、このような感想を抱いた。もちろん、日本全体がそもそも島国なわけだが、その中でも島嶼部や離島については、国境離島かどうかということにかかわらず、ボーダースタディーズにおける重要なテーマになり得るということを改めて実感したセミナーであった。

なお、本参加記の執筆者（地田）は、セミナーの現場でウェビナー周りのロジも担当していたが、Zoom ウェビナーでの会場音声が届き取りにくいとの連絡があった。音声については現場で地田がウェビナーの音声を確認するなど万全を期したつもりだったが、聴き苦しい点があったことをお詫び申し上げる。[地田徹朗（名古屋外国語大学／JCBS 理事）]

## 「東ユーラシア研究」プロジェクト (EES-SRC) 主催・関連セミナー

「東ユーラシア研究」プロジェクト (EES-SRC) では、センターニュース 170 号での報告から、セミナーを多数開催しました。YouTube チャンネルでは、その模様を動画でご覧いただけます。順にご紹介します。

2023 年 11 月 15 日 (水)、オンラインで UBRJ / EES 実社会のための共創研究セミナー「『難民』は日本でどう受け止められたか：インドシナ難民からウクライナ避難民まで」が開催されました。大茂矢由佳氏（埼玉大学）の報告が行われ、司会・討論は池炫周直美氏（北海道大学公共政策大学院）でした。

<https://www.youtube.com/watch?v=tXjpSIZAuNM>

2024 年 1 月 20 日 (土) には、明治学院大学白金キャンパスにて、シンポジウム「戦争、国家、失われた故郷 北方領土×硫黄島」が開催されました。基調講演は岩下明裕氏 (SRC) の「国境島嶼史・北方領土史について」、石原俊氏 (明治学院大学/国際平和研究所/全国硫黄島島民 3 世の会顧問) の「硫黄列島史・小笠原諸島史について」でした。パネルディスカッションでは、「島民子孫の歴史継承の取り組みについて」と題し、久保浩昭氏 (北方領土国後島元島民 2 世/旧通信省千島回線陸揚庫保存会会長)、西村怜馬氏 (硫黄島旧島民 3 世/全国硫黄島島民 3 世の会会長)、羽切朋子氏 (硫黄島旧島民 3 世/全国硫黄島島民 3 世の会副会長) の報告が行われました。



コメントは岩下明裕氏、石原俊氏、鈴木英夫氏（毎日新聞オピニオン編集部）、司会は山田淳子氏（北方領土歯舞群島志発島元島民3世／写真家）でした。

<https://www.youtube.com/watch?v=i5Earx1TvYQ>

2024年2月26日（月）には、スラブ・ユーラシア研究センター公募研究共同研究班セミナー主催で、川久保文紀氏（中央学院大学）による報告「地政治から読み解くテイクポリティクス」が行われました。



<https://www.youtube.com/watch?v=K2EJLaJ8iiY>

2024年5月26日（日）には、北九州市立大学北方キャンパスにて、オンライン併用で、JCBS/UBRJ/RINGS セミナー「『しま』を考える：共同体の想像と協働」が開催されました。天野尚樹氏（山形大学）による「『ヨリ島』は入っているか：奄美群島の構築と『愛される帝国』の創出」、黒石啓太氏（北九州市立大学）による「島嶼自治体における住民・議会・行政」の報告が行われました。司会は赤星道子氏（特定非営利活動法人国境地域研究センター・会員）、討論は地田徹朗氏（名古屋外国語大学）と花松泰倫氏（九州国際大学）が登壇しました（前掲の参加記を参照）。



<https://www.youtube.com/watch?v=Q7CmBHyl0is>

2024年6月20日（木）には、長島徹氏（外務省／北海道大学大学院博士後期課程）によるオンラインセミナー「領土拡張の道具？ロシアの国籍付与を考える」が開催されました。コメンテーターは、山田哲也氏（南山大学）、西田充氏（長崎大学）でした。



<https://www.youtube.com/watch?v=7uS5XzYZUhs>

[松本（祐）]

## ウクライナ国立ポルタワ教育大学との交流

ウクライナ中部ポルタワではロシア軍のミサイルによる攻撃が続いており、センターが協定を結んでいるポルタワ国立教育大学英語・世界文学学習法研究教育センター所長のオルハ・ニコレンコ教授によると、市内では住宅や幼稚園、学校、大学に被害があったほか、7月中旬の段階で一日に数回の停電や断水が続いていて、ポルタワ国立教育大学の教育・研究環境も悪化



ポルタワ教育大学

しているそうです。ニコレンコ教授自身も近隣地域を含めた復興支援に携わっていらっしゃるとのことでした。この連絡を受けて、センター教員有志が個人的に寄付を行いました。こうした状況の中でも教育・研究活動を維持する努力が続けられていることは尊敬に値します。5月9・10両日にはゴーゴリ研究会が開催され、地元ポルタワ出身の作家の名を冠した文学・

文化研究の学会が 16 回目を迎えました。センターからは安達准教授がビデオによる開会のメッセージを送りました。[安達]

## 専任研究員セミナー

専任研究員セミナーが以下のように開催されました。

2024 年 5 月 16 日 岩下明裕

報告：Japan's Geo-politics under Russia's War in Ukraine

コメンテータ：ジェームス・D・ブラウン（テンプル大学）

セミナーは岩下明裕研究員によるペーパー“Japan's Geo-politics under Russia's War in Ukraine”をもとに、*Japan, Russia and their Territorial Dispute: The Northern Delusion* の著書で知られるテンプル大学のジェームス・D・ブラウン教授をコメンテーターとして開催されました。岩下研究員のペーパーは、主として 2 つのパートに分かれていました。前半はここ 10 年の北東アジアの国際政治を分析し、特に安倍晋三首相による失敗した中露離間及び北方領土問題解決にむけた政策に分析が当てられました。とくにロシア極東の発展における中国の支配が、日韓などがロシアの「不可欠の隣人」として競合できないほど強まっていることを示しました。またペーパーでは 2022 年以降「冷戦 2.0」、1992 年からウクライナ戦争までを「間氷期」とする興味深い時期区分が展開されました。

ペーパーの後半は、北海道新聞との連携で実施した、根室及び稚内市民のウクライナ戦争後の対ロシア観の分析でした。分析は微細なものでしたが、注目すべきは、183 名の回答者の 79% が戦争の責任をロシアにあるとし、「国際法の侵害」「プーチンが悪い」「日本の安全保障への脅威」「北方領土は戻ってこない」「ウクライナが可哀そう」などのコメントが寄せられたことでした。時期区分についてはさまざまな疑問や議論が噴出しましたが、世論調査の分析についてはブラウン教授からさらに深めてほしいという後押しがあるなど、高い評価を受けていました。[ウルフ]

## 研究会活動

センターニュース 171 号以降、センターが主催・共催した諸研究会活動は以下の通りです（国際シンポジウムを除く）。[編集部]

**4 月 15 日 Book Talk** Jane Burbank (Professor Emerita, New York University) and Frederick Cooper (Professor Emeritus, New York University) “Post-Imperial Possibilities: Eurasia, Eurafrika, Afroasia”

**5 月 8 日 Seminar (New York)** “Heritage of Soviet Melodrama” Daisuke Adachi (SRC), Tatiana Efremova (Columbia University), Junna Hiramatsu (University of Tokyo), Yulia Kim (Columbia

University), Satoko Kitai (Osaka University), Michiko Komiya (Tokyo University of Foreign Studies), Oleg Lekmanov (Princeton University), Yuri Leving (Princeton University), Mark Lipovetsky (Columbia University), Anastasiya Osipova (University of Colorado Boulder), Serguei Oushakine (Princeton University)

**5月26日 JCBS / UBRJ / RINGS セミナー (福岡)** 「『しま』を考える:共同体の想像と協働」天野尚樹 (山形大学) 「『ヨリ島』は入っているか:奄美群島の構築と『愛される帝国』の創出」、黒石啓太 (北九州市立大学) 「島嶼自治体における住民・議会・行政」

**5月31日 講演シリーズ「危機を生きるウクライナと世界」第4回** 服部倫卓 (SRC) 「モルドバが『次の標的』にならないために」

**6月1日 生存戦略セミナー** 李優大 (東海大学) 「戦間期におけるソ連・イランの跨境史」

**6月3日 Special Talk** Justin Hayhurst (Australian Ambassador to Japan) “Australia-Japan Cooperation in the Indo Pacific: Security, Climate/Energy, Education, Science and Technology”; Akihiro Iwashita (SRC) “Australia: An Indispensable Partner for Japan”

**6月11日 10th Joint Symposium (Seoul)** “Co-existence and Interdependence in Eurasia and East Asia” Session 1: Dynamics of Contemporary Russian Culture Surrounding Power: Daisuke Adachi (SRC) “Russian Melodrama after the War”; Jiyoung Hong (Yonsei University) “The Story of Light in the Struggle Against the Authorities: From Nikolai Gogol’s *Nevsky Prospekt* to the Protest of Alexei Navainy’s supporters”; Special Lecture: Akihiko Iwashita “Russian War in Ukraine and Northeast Asian Geo-politics”; Session 2: Russo-Ukrainian War and Refugees in Eurasia: Naomi Chi (Hokkaido University) “The Plight of Refugees in East Asia: Ukrainian Evacuees in Japan”; Vadim Slepchenko (Seoul National University) “The Russo-Ukrainian War and Russian Draft Evasion Refugees”

**6月14日 Lunch Talk** Siarhei Bohdan (University of Regensburg / SRC) “The End of History: How I Study It in Eastern Europe, the Middle East, and Central Asia”

**6月19日 北海道中央ユーラシア研究会昼食懇談会** 「Central Eurasian Studies Society 2024 発表報告およびカザフスタン調査報告」 松元晶 (北海道大学大学院博士後期課程)、Mirlan Bektursunov (日本学術振興会特別研究員・京都大学)、廣田千恵子 (日本学術振興会特別研究員・SRC)

**6月19日 UBRJ / EES Seminar** Sergei Golunov (SDU University, Kazakhstan) “Global Perspectives on Cross-Border Cooperation: Where Does Central Asia Stand?”

**6月20日 UBRJ / EES Seminar** 長島徹 (外務省/北海道大学大学院博士後期課程) 「領土拡張の道具? ロシアの国籍付与を考える」

**6月22日 2024年度北海道民族学会第1回研究会・総会**

**6月22日 内陸アジア史学会シンポジウム（東京）** 「モンゴル帝国史研究の現在と課題」第1セッション「チンギス・カンの実像」宇野伸浩（広島修道大学）「チンギス・カン研究と初期グローバル化としてのモンゴル帝国」、白石典之（新潟大学）「考古学からみたチンギス・カン」；第2セッション「ジョチ・ウルスとチャガタイ・ウルス」長峰博之（小山工業高等専門学校）「ジョチ・ウルス史の研究動向から：史料研究・考古学・貨幣学」、松井太（大阪大学）「『周縁』からみたチャガタイ＝ウルス：トゥルフアン発現モンゴル語・ウイグル語資料を中心に」；第3セッション「フレグ・ウルスから見えるもの」大塚修（東京大学）「モンゴル帝国時代ペルシア語歴史叙述研究の最前線」、諫早庸一（SRC）「フレグ・ウルスの崩壊：「14世紀の危機」の解明に向けて」；第4セッション「元朝から広がる海陸交通路」村岡倫（龍谷大学）「最古の世界地図『混一疆理歴代国都之図』から見る内陸アジア」、向正樹（同志社大学）「混一疆理歴代国都之図から見る海域アジア」

**6月24日 AA研フォーラム（東京）** 宇山智彦（SRC / 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）「帝国主義再来の時代に帝国論とナショナリズム論はどうあるべきか：ロシア・中央アジア関係史を踏まえて」

**6月28日 公開講演会** 野町素己（SRC）「国際関係から考えるマケドニア標準語形成史：特にソ連の言語学者に注目して」

**7月2日 Online seminar** Milena Dragičević-Šešić (Professor Emerita, University of Arts, Belgrade) “South East European Dissonant Heritage, Conflictual Memories and Contemporary Arts”

**7月4日 SRC Seminar** “Roma Civic Emancipation before WWII: National and Transnational Dimension and the Problems of the Standardisation of the Romani Language” Elena Marushiakova (Institute of Ethnology and Social Anthropology of the Slovak Academy of Sciences), Veselin Popov (Institute of Ethnology and Social Anthropology of the Slovak Academy of Sciences)

**7月5日 SRCW/CGR 実社会のための共創セミナー** 春日文子（長崎大学）「人類を取り巻く地球環境：（プラネタリー）バウンダリーズ、ヘルス、リスク」

**7月9日 Special Seminar** Mark Edele (University of Melbourne) “Russia’s War Against Ukraine: The Whole Story”

**7月10日 SRC Seminar** Adrienne Edgar (University of California, Santa Barbara) “Intermarriage and the Friendship of Peoples: Ethnic Mixing in Soviet Central Asia”

**7月11日 三者共催ロシアセミナー** 「急変する国際環境下のロシア極東・シベリア」服部倫卓（SRC）「なぜ今、ロシア極東・シベリアを問うのか？」、田畑伸一郎（北海道大学名

誉教授)「ロシアの北極域：開発政策とその進展」、齋藤大輔(ロシアNIS貿易会)「プーチンの東方シフトで変わるシベリア鉄道とバム鉄道」

**7月13日 SRC セミナー** 日臺健雄(和光大学)「戦時下ロシアの石油・ガス収入と国民福祉基金」

**7月16日 中村・鈴川基金奨励研究員報告会** 奥田弦希(東京大学大学院博士課程)「二重制期ハプスブルク帝国の対ムスリム政策：イスラームの法的公認過程を中心に」

**7月17日 Book Talk** Vladimir Hamed-Troyansky (University of California, Santa Barbara) “Empire of Refugees: North Caucasian Muslims and the Late Ottoman State”

## 人事の動き

### 大須賀みか助手の退職

しばらく休職していた大須賀みか助手が、2024年3月末をもってセンターを定年退職されました。大須賀さんは北海道大学文学部を卒業後、貿易会社勤務などを経て、1990年にセンターが全国共同利用施設となるのに伴い職員を募集した時に採用されました。今のセンターの現任教職員の誰よりも古くから勤務されていたことになりま。大須賀さんの採用を知らせる1990年7月のセンターニュースには、全国共同利用施設化というトップニュースに続き、それまで研究報告会という名称で開かれていた夏の定例イベントが、国際シンポジウムとして開かれるようになったことも書かれています。センターの活動がまさに飛躍的に発展していく時期に着任されたのです。



大須賀さんは、日本語・英語・ロシア語にまたがる編集・出版や広報と、来訪者の受け入れにかかわる多種多様な仕事を担当し、特に外国人研究員への対応には大きな力を注いでくださいました。国内外からセンターを訪れて大須賀さんの世話になった人は数多いことでしょう。センターはかつて、雑誌やセンターニュースのほかに、論文集・研究報告集などを自前でたくさん出版していましたが、その大半の版組や印刷発注、発送を大須賀さんが担っていました。版組の技術は時代に合わせて向上させていて、いつ勉強しているのだろうと不思議に思ったものです。個人情報保護についての世相が厳しくなるまでは全国の関連研究者名簿も作成していましたし、研究会の案内掲示なども、シンプルなデザインながら見やすい

ものをサッと迅速に作ってくださいました。激務だったはずですが、過度に細かいことにこだわらないためか、いつもマイペースな雰囲気を漂わせているのも大須賀さんの魅力でした。

センターが2008～2012年度に、若手研究者をオックスフォード大学、ジョージワシントン大学、ハーヴァード大学に派遣するインターナショナル・トレーニング・プログラム(ITP)を実施した際にはそのサポートに携わり、若手を励ます以下のようなメッセージを寄せられました。「レフェリー制の雑誌の編集にかかわっていると、査読者のかなり手厳しいコメントを投稿者に送らなければならないことがあります。そんなときいつも「これでへこたれず、研鑽をつんで、再挑戦してくれよ」と願います。英語力をつけるのも大事ですが、積極的に挑戦する気力と打たれ強さをもって、どんどん『Acta Slavica Iaponica』などのレフェリー制の雑誌へ投稿してください」(<https://src-h.slav.hokudai.ac.jp/itp-hp/support/support.html>)。今の若手研究者たちにもぜひ受け止めてほしいメッセージです。

センターニュースでは以前、裏表紙に編集後記のようなものを載せていました。無記名なので誰が書いたか分からないものもありますが、大体1994年頃から大須賀さんがこれを書いていたと思われます。季節の話題から大学を取り巻く状況までさまざまなことが書かれていましたが、特にセンターの内輪ネタについての筆が冴えており、大須賀さんの個性的な目を通してセンターの雰囲気を知らるために編集後記を読むのを楽しみにしていた人は多かったのではないのでしょうか。センターを支える事務職員やアルバイトの方々への心遣いがよく表れていたのも、大須賀さんの編集後記の特徴でした。

2006年夏号からは、それまでも時々あった、バーベキュー・エクスカージョン・観楓会・年末パーティなどの写真を裏表紙に載せる方式が基本になりました。今では考えられないことですが、この頃はほぼ季節ごとにセンター全体の宴会があったのです。これらの写真に大須賀さんが添えるキャプションも実に味があって良かったのですが、普段は見られないほど楽しそうな表情で宴会に参加していた大須賀さん自身の写真をほとんど載せなかったのは、今となつての反省点です。山下祥子助手が若くして亡くなったような特別な時には、編集後記も復活しました。しかし2012年秋号から、裏表紙に目次を載せる現在の方式になり、大須賀さんの編集後記やキャプションは読めなくなってしまいました。

大須賀さんの退職で、一つの時代が終わったような寂しい気持ちになりますが、本当にさまざまな面で大須賀さんがセンターに貢献してくださったことに、深くお礼を申し上げたいと思います。[宇山]

## 研究員・事務職員の異動

大須賀 美香 助手 2024年3月31日(退職)

ANTONENKO, Viktoriia 学術研究員 2024年4月1日(採用)

松本 祐生子 特任助教 2024年5月1日(採用)

上原 直子 事務補佐員 2024年6月1日(採用)

## 第3回 マトリョーシカ・インタビュー

野町 素己 教授

SRC の研究員に自身の研究や SRC への思いについて聞き出すインタビュー。マトリョーシカのように研究員の少し内側の姿に迫るコーナーを目指します。

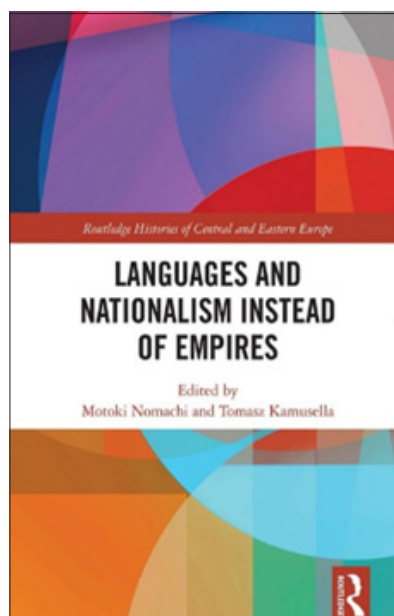
第3回目は、昨年度まで2年間センター長を務められ、やっと肩の荷が下りたようすの野町素己教授にお話しを伺いました。



### 言語と社会の問題に向き合い続けて

—野町さんは昨年度トマシュ・カムセラさんとの共編著で“*Languages and Nationalism Instead of Empires*”という本を出版されました。この本では言語学とその他の人文科学分野との学際的な研究を試みていますが、FVFP で滞在される言語学の先生方のリアクションを見る限り、これは珍しいかつチャレンジングなことですよ。その意義や面白さは何でしょうか。

まずカムセラさんは大変視野の広い歴史学者です。歴史学の視点から言語を研究の題材としている方です。私は言語学者なので、同じ現象について違うディシプリンで見るということになります。これまで組織したさまざまな国際シンポジウムや数多くの研究会を通じて、異分野の人とは時に議論がかみ合わないところもある一方で、言語を扱う歴史学者や社会学者との交流はそれなりに多く、特にカムセラさんとは長年の付き合いもあり、これまでも共同編集作業を通じて、率直に意見交換できる関係を築きました。その結果分野が違って、お互いに協力できるなと感じていました。元々私が研究していたのは言語学の中の言語の構造についての話で、ロシア語の格（日本語の「て・に・を・は」のようなもの）が、それぞれどのような意味を持つか、似た意味でどのように使い分けられるか、それがどのように歴史的に変わってきたか、ということに興味がありました。2008年にスラブ研に就職するまで地域研究など意識したことはありませんでした。大抵の古典的な言語研究者ならそのような意識は持つ必然性もないかもしれません。しかし、就職以来、地域研究の中で言語研究を進めることをより意識することにはなりました。自分のコアとして言語の構造の研究は続けながらも、言語と社会・歴史の問題についても考えています。言語は記号システムではありますが、あくまでも人間社会の中で機能していますし、その社会が変化することで、言語も何らかの変化を被ります。言語変化には言語内的な変化もありますが、言語外的な要素も非常に重要で、例えば、支配





者が教育も含めてどのような言語政策を行うかは言語状況に大きな影響を与えますし、また言語をめぐる利害関係者の駆け引きは政治的な面から考えないといけません。多様性が重要な価値観の一つである今日では、ある国家で行われる少数話者言語の担い手の権利が保証されているのか、されているとしたらどの程度なのか、言語保全のためにどのような法整備が必要か、また消滅危機言語をいかに復興させられるかは持続可能性の問題と直接結びつきます。このように、全ての領域ではないにしても、地域研究で扱える言語研究は学際的に発展できることが多く、実際にそうすることが有益だと思います。私の理解では、スラブ・ユーラシア研究センターが推進する地域研究の理想像の一つは、様々な分野の専門家が共通の地域（旧東欧・ソ連とその隣接地域）を分析し、その地域の特殊性を多角的に明らかにしていくということです。お話にあがった論集はかつてカムセラさんと共同組織したシンポジウムの成果が中心になっていますが、発表の寄せ集めではありません。著者、査読者、編集者が一本一本の論文に批判的に向き合って仕上げていく過程は、学際性とその意義を肌で感じる素晴らしい経験でした。

—最初は言語構造の研究から始まったということですけど、言語学に隣接するあらゆる分野に急激に世界が広がっている印象ですね。

「スラブ研に就職したから」という以外に、専門が広がっていったのには、留学経験もあると思います。私はユーゴスラビア（1992年から2003年まで存在した、セルビアとモンテネグロからなる連邦国家のこと）に留学しました。留学先を選んだのは、スラブ諸語の文法の類型的な研究をしたかったからで、その大家の先生がベオグラード大学の先生だったからです（センターニュース163号の追悼記事参照のこと）。私が学生の時に勉強したのは「セルビア・クロアチア語」と呼ばれていました。ご存知の通り、この連邦国家は崩壊し、新たな独立国家が生まれ、その予兆は既に60年代からありましたが、言語も名前を変えていきました。かつてのセルビア・クロアチア語は、今日ではセルビア語、クロアチア語、ボスニア語、モンテネグロ語と呼ばれます。もちろん言語そのものの実態が急が変わったわけではありません。今日でも、各言語の話者がそれぞれ標準語を話せば、ほぼ100%の理解が可能です。今年3月に着任したヤスミナ先生と私はそれぞれボスニア語とセルビア語で話していますが相互理解に全く問題ありません。それだけに、それぞれの言語の正当化が問題となり、「新言語」は（再）標準化に向かうこととなります。留学時代にその変化を目の当たりにしたのは強烈な経験でした。

ベオグラードに留学していましたので、セルビア的な見方（といっても一枚岩ではありませんが）に慣れてしまいがちでしたが、それぞれの話者や政治的立ち位置を理解しないとイケない問題です。授業をするようになって、「セルビア語とクロアチア語は同じですか」、「モンテネグロ語はありますか」、「そもそも方言と言語はどう違いますか」ということを聞かれるようになりまして、SRCの専任教員セミナーでさえも数年に一回位思い出したように同じようなことが聞かれます。これらの質問に答えるには標準語の構造、方言の正確な理解に加え、標準語形成史、現代の言語と社会の問題を考えざるを得なくなります。2024年7月に青島研究員が組織した歴史学の夏シンポジウムでも言語問題を扱う報告者は複数いましたし、いろいろな連携の可能性があることを改めて感じます。

—単なるイメージですが、そういう学際的な場へすぐ出てきやすい分野と、なかなかそういう場へは出て行かない分野があるのではと思いますがいかがですか。

それはあると思います。言語学そのものがかなり多様なので、言語学の中でも学際的展開が自然に求められる分野と、そうではない領域の両方があるでしょう。ただ、私が本来関心を持っていた言語構造の研究もコン



ピューター言語学の枠組みを使えば、より汎用性が高い成果が出るかもしれません。研究者としてどれぐらい広い関心を持てるか、そしてどの程度他の分野に目を向けられるか、現実的にどのようなスキルが身に着けられるかというのにかかっています。

—野町さんは東欧やバルカン地域での言語学者の足跡について手紙などの調査やインタビューをされていますよね。私、言語学というとシステマチックな研究対象をイメージしていたんですけど、やはり人が作り出しているものだからなのか必ずしもそうではないんだというイメージに変わりました。

どの学問分野にも、いかにその分野が発展したかという学問史があります。数学にも数学史があり、物理にも物理学史があるといったものです。言語学にも言語学史があり、スラブ語学にもスラブ語学史があります。最近、様々な「研究者の再評価」に関わる研究報告の依頼を受けたのがきっかけで研究史に興味を持ちました。歴史的に多様な学説が出てくるわけですが、その背景と相互関係には純粋に学問的なものだけではなく、師弟や敵対など人間関係、当時の政治状況が深く関わっていることもあります。同時代の他分野の発展がヒントになることもあります。突然現れたような説であっても、いろいろ裏を探っていくと、その理由にたどり着ける場合もあることを知りました。1920年代～50年のソ連の言語学のように厳しい統制のもとで、発言一つで失脚だけではなく生死に関わることさえもありました。これがスラブ語学や言語学プロパーの研究手法とは思いませんが、研究史を明らかにすることで、当該分野の本質的理解が深まると考えます。

—結構歴史学っぽいアプローチに近づいてきているんですね。

その通りです。いろいろな国の古文書館を訪れて、膨大な量の資料をあさり分析する、存命の方がいれば当時の様子を直接伺う、また最近では個人所蔵の資料をお願いして見せていただいたことも何回もあります。手紙や日記類は臨場感があり、研究理論の背景にある人としての研究者像を教えてください。最近では文豪レフ・トルストイのひ孫で、優れたスラブ語学者であったニキタ・トルストイの未刊行の初期著作をご夫人のトルスタヤ先生に特別に見せていただき、20世紀半ばのチトー・スターリン決裂期のソ連におけるマケドニア語研究の実態を論文にすることができました。とはいえ、私は歴史学の専門教育を受けているわけではありません。今日のSRCは歴史研究者が多いですから、そういった第一線で活躍す

る百戦錬磨の皆さんから見たら、「何か違う」と思われるかもしれません。ただ、手法で重なる部分はありますし、SRCの歴史学者の皆さんから学んだのかなと思います。

## カシュブ語との邂逅の裏話

一野町さんはセルビアとポーランドに留学されていたそうですね。そこでの経験が研究にも大きく影響したということはありませんか。

セルビアとポーランドに大体2年ずつ行きました。上述のセルビア人の先生には研究者として、また人生を歩むうえで決定的な影響を受けました。詳細はセンターニュース163号に譲ります。元々はポーランドに行く予定はなく、そのセルビア人の先生の指導を受けるためにベオグラードにいたわけですが、日本の所属大学院の指導教員が「東大とワルシャワ大学との協定でポーランドに行って日本語を教えますか」とおっしゃいました。当時大学間の交流協定があったのですが、なかなか出向する教員がおらず、博士課程の大学院生で繋いでいるような状態でした。私が留学中なのを覚えていたのかどうか知りませんが、その指導教員の勧めで留学先のセルビアで学ぶべきことを中断して、別の国に行くことになりました。ポーランドに自分が今行きたいと思うかどうかよりも、指導教員に「せっかくチャンスを与えたのにあいつは逆らった」と否定的に取られる怖さがありました。そこで、セルビア人の指導教員に状況を説明しに行きました。私がセルビアで指導を受けて勉強を始めたばかりでしたから当然難色を示されましたが、それでも「ポーランドの言語学の伝統は素晴らしいし、スラブ語の世界を広く知ることは、あなたにとって良い経験になります。でも終わったら必ずベオグラードに戻ってきなさい」と言って、温かく送り出してくださいました。結果として、セルビア1年弱、ポーランド2年、セルビア1年という外国滞在になりました。

ポーランドでの任務はワルシャワ大学の東洋言語研究所で日本語を教えることでしたが、それ以外の自由時間は朝から晩までポーランド学科とスラブ学研究所の授業を聴講しました。どちらの国でも大家と言われている先生が基礎的な講義をしっかりと行い、先駆的な研究を含んだセミナーもありました。その授業の一つとしてヤヌシュ・シャトコフスキという著名な方言学者の講義がとても新鮮でした。既に老教授でしたが碩学で頭脳明晰、現地調査に基づくデータなども多く、笑い話なども含めて授業が大変上手でした。その授業で、学生と一緒にいろいろなスラブ語の方言テキストを分析する機会がありました。要は方言の文法と語彙の分析を行い、最終的にポーランド語に訳すわけですが、まだ大して知らないポーランド語に直すので自分にとって大変な作業でした。その時に読んだカシュブ方言のテキストが将来の研究のターニングポイントとなりました。ポーランド北部で話されるこの言葉はポーランド語と似てはいますが、私には辞書や文法書を見てもわからないところが沢山ありましたので、授業が終わるたびに、シャトコフスキ先生に直接お伺いしました。そうすると、授業ではさらっと進んでしまっても、実は先生も気づかず、また答えをご存じない現象が結構出てきました。これは少し腰を据えて、現地調査もしたら新しいことが言えるかもしれないと漠然と思いました。ですから、予定外のポーランド行きで、博士論文への新たな方向性が少し見えた感じがしました。

一野町さんのプロフィール上、カシュブ語研究が出てきますが、日本にいたとおそらく可視化できないようなローカルの少数話者言語をどうやったら発見できるのかなと思っていましたが、そういった経緯があったんですね。

まさに偶然です。カシュブ語の面白さは多岐にわたりますが、私がまず興味を持ったのは、ドイツ語からの文法的な借用でした。ただ、借用と言っても、ドナー言語であるドイツ語のパターンの完全なコピーではなく、使用にいろいろな制限があるわけです。ですから「これはドイツ語の借用」とラベルを張るのは簡単で、これまでの研究者はそれ以上分析してきませんでした。私が気になったのは、いつごろ借用が起きたのか（もちろんわかればですが）、またどこまでコピーと言えるのか（ドナー言語との違い）、地域的にどのような広がりがあるのか（ドナー言語の分布と関連や歴史的な人的移動の可能性）、また言語接触の一般論からみて、どのように特徴づけられるかなど、疑問（あるいは学術的課題）は山積します。

また、カシュブ語は2005年にポーランドの地方言語として公的な地位を得ますが、それ以前、特に共産主義時代は「ポーランド語の方言」と位置づけられていました。セルビアで見聞きした「言語と方言の違い」をまたここでも意識することになりました。ポーランドは共産主義が崩壊し、言語的多様性を重んじる主な（西）ヨーロッパ諸国と歩調を合わせる過程で、カシュブ語も法的な位置づけを得ましたが、これはカシュブ語だけに留まる話題ではありません。ポーランドにおいてやはりポーランド語の方言と扱われてきた「シロンスク語」の位置づけと関わってきます。両者の言語活動家は連携し、知識と経験を共有しています。こういったことは、言語を巡る学際的研究の対象として大変面白いと思います。

## 地域研究にボーダーレスに向き合う

—そうした研究を現地の研究者が行うのとは違って、日本人が乗り出していく時に、研究内容は当然緻密であって全く遜色ないわけですけど、プレッシャーみたいなものはありますか。どういったメンタリティーで臨んでいるのでしょうか。

経験的に「日本人なのに」という文脈で語られることが、ローカルな情報発信になればなるほど増える気がします。「あなたの研究は面白い。我々が気づかないことを我々と全く異なる日本人ならではの視点、日本語のプリズムを通して眺められるからだ」という、根拠のかけらもない、呆れる限りのステレオタイプの押しつけです。またこの手の押しつけは、私に関係する領域である限り、国際化が意識されない比較的閉じられた現地世界で目立ちます。研究者として当然ではありますが、何人であるかではなく、現地の研究も外国人が行っている研究も両方押さえて、さらに比較や類型化の対象になる現象にも目を向けて、研究対象の分析を多角的に行い、説得力ある結論を導くことです。自分ができているかはどうか心もとないですが、少なくともこの意識は持って研究に臨んでいます。

—そうした研究を可能にするのも、ご自身の言語力あってのことかと思いますが、野町さんは一体何言語を操られるのでしょうか。「野町さんとはボスニア語、クロアチア語、セルビア語 (Bosnian/Croatian/Serbian: BCS) の会話を楽しむ仲間だ」という FVFP 滞在教員の話もありましたよね。

言語学をやっていますというと語学マニアと誤解され（そういう人も少なからずいるとは思いますが）、必ずその質問をされます。また SRC でも「言語学者だから正しい言葉使いにうるさい」などと言われたことも何回もあります。残念ながら言語力の低さは自覚していますし、また言葉の間違いを探しているわけでもありません。ただ、スラブ諸語はお互いによく似ているので、特に近いグループの言語だと、初めて聞いた単語や構文でも類推で理解

することは比較的あるように思います。言語を通じた経験で感じたのは、言葉は人を繋ぎ、関係を変えるということです。カナダにあるカシュブ人集落を訪問した時、片言のカシュブ語で話したら、現地のご老人は大変喜ばれました。また、マケドニア人研究者とはセルビア語で話していたのですが、少し前に「君はいつになったらマケドニア語で話してくれるんだ。君には難しくないだろう」とぼつりと言われました。これは不意打ちでしたが言葉に対する意識が変わりました。研究・調査人脈に影響が生じることもよくわかりました。

一人脈を繋いでいくのは研究者の宿命ですね。だからこそ個性が出るところでもありますし、大変に感じる面もあると思いますが。

私のように現地調査も行う研究者は、研究者同士の人脈に加え、現地調査での人脈も築かないとできません。対立するグループを相手にすることがあるので、慎重さも求められます。難しいことはありましたが、これまで非常に多くの方が言語データや資料収集に惜しみなく協力してくださいました。研究者コミュニティにも育てられ、支えられていることを実感しています。思い込み気づかないことが多々あるので、今でも論文を書いたら、提出前に必ず数人の専門家に原稿を見せ、意見をいただきます。そういうことも人脈がないとできませんね。それも有り、研究の関心の幅は広がり、大学時代とだいぶ違うテーマにも取り組んできました。ただ、複数の領域の研究に取り組むと、外から専門性が見えにくくなります。「ロシア語の動詞」だけを生涯かけて研究している人から見たら、私の専門性など問題外かもしれません。ただ、どの領域であれ自分の論文が引用されていると、何らかの貢献ができたと感じます。ですから、私は専門のスラブ語学という看板は掲げ続けたいと思います。経験的に、離れていると思われる領域が、あとで別の文脈でつながることは珍しくありません。かつての研究テーマに全く新しい視点で戻ってくることは、旧友の新しい長所を見つけた時の喜びに例えられるかもしれません。

(取材：田宮 彩也香)

### 野町 素己 (のまち もとき)

1976年生

北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター教授

東京大学文学部卒業

東京大学大学院人文社会系研究科修士課程修了

同博士後期課程博士号取得

2008年 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 准教授

2012年 -シカゴ大学東欧・ロシア/ユーラシアセンター客員研究員

2016年 第13回日本学術振興会賞及び日本学士院学術奨励賞受賞

2017年 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 教授

2019年 セルビア・スラブ学協会名誉会員

2022-2024年 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター長

2023年 第25回ケネス・E・ネイラー記念南スラブ言語学講演講師



## 北海道での人生のアート (私の生涯にわたる旅からのいくつかのメモ)

ミコラ・リャプチュク

(ウクライナ科学アカデミー政治・民族問題研究所/  
センター 2023 年度外国人招へい教員)

1.

私たちは皆、東洋への旅人だった。

私の若い頃、1970 年代のソ連では、実際のところ選択肢はあまりなかった。それは選ばれた人々だけが外国旅行する権利を持つ、厳格に閉じられた社会だった。共産主義の「兄弟」国への旅行ですら問題があった。アメリカ、フランスや日本については言うまでもない。

あの国の独特の生活様式を反映した多くの両義的なソヴィエト・ジョークの一つでは、老人が友人たちと共に過去を思い出し、「もう一度パリに行きたい……」とため息をつく。

「え？ あそこに行ったことがあるの？」と彼らは驚いて尋ねる。

「いや、でも、行きたかったことがあるんだ……」と彼は答える。

ソ連のシステムの特異性に不案内な外国人は、このブラックユーモアの本質を理解できないかもしれない。ジョークの中の老人は、どうやら過去に外国旅行をしたいと思っていたようで、口頭であれ行動においてであれ、その方向に向けて多少の努力をしたのだろうが、その思いをあまりにもひどく挫かれたため、それから長年、異端的な夢を再び表明する勇氣さえ出なかったのだ。

しかし、1970 年代に生きた私たちは、ソ連がスターリン主義下の 20 年前ほど全体主義的ではなかったので、比較的幸運だった。少なくとも、ジョークは厳しい罰を受けることなく共有でき、外国の多くの良い本や映画が閲覧可能になり（著者が「反動的」として非難されていない限り）、大都市では萌芽的な市民社会が発展した。その中核には政治的異論派があり、周縁ではさまざまなカウンターカルチャー運動が展開された。

東洋は私たちの主要な目的地になった。

もちろんそれは、私たちにとって西洋と同じくらいしっかりと鉄のカーテンで閉ざされていた、現実の東洋のことではない。それは古い文化、高い精神性、神聖な知恵が息づく想像上の東洋だった。私たちは、ペルシアのスーフィー詩人から日本の発句、枕草子から源氏物語、李白や杜甫から芭蕉やバガヴァッド・ギーターまで、好適と思える本を折衷的に選んでむさぼるように読んだ。それは、外見上の異国情緒と古代の知恵と精神性の謎めいたオーラ



センターで講演する筆者

以外にはほとんど共通点のない、さまざまな原典の奇妙な混ぜ合わせだった。私たちがこれらすべてを必要としたのは、人生の限界と折り合いをつけ、多くの若者が20代で発見する存在論的なギャップを埋め、公式の共産主義イデオロギーでも国家に取り込まれた（そしてKGBに深く浸透された）正教会でも和らげることのできない、実存的な不安を手なずけるためだった。

幸いなことに、古代東洋は特殊な研究分野であり、ほとんどの人々の関心が低く、知識はそれ以上に乏しく、ソ連の政治委員もあまり介入する義務を感じていなかった。ソ連における東洋学は、片隅にいるように見えながらスターリン主義の暗黒時代を生き延び、目を見張るほど多量の翻訳、解説、研究文献を生み出した。私たちはそれらを発見し、まるで陰謀家か秘密結社の非公式メンバー、中世の宗教組織の熱心な信者でもあるかのように、知識を共有した。

1970年代に、この分野で私たちに指針とインスピレーションを与えてくれる2つの非常に重要な本が出版された。一つは禅に関するエッセイを含む川端康成の散文で、もう一つはヘルマン・ヘッセの著作、つまり独創的な『荒野の狼』、『ガラス玉遊戯』、そして特に『シッダールタ』と『東方への旅』だった。それは私たちの聖書であり、コーランであり、マルクス・レーニン主義の小教程だった。1970年代のウクライナのアンダーグラウンド文化はすべてそれらのテキストからさまざまな影響を受けており、多くの作家のイメージ、暗示、インスピレーションはその背景なしにはほとんど理解できないと私は思う。

10年後、ペレストロイカが進むにつれて、背景は細分化し、消失した。物理的にも知的にも世界が開かれた。新しい文化的創作物は新しい生活体験と混ざり合い、新しい情報の強力な流れがさらに強力な社会的・政治的变化と絡み合った。かつての文化的アンダーグラウンドは主流に変わり、かつての政治的異論派は国会議員となり、カウンターカルチャー活動家は受賞者、蓄財者、大衆的アイコンとなった。

私たちは今でも時々東洋に旅行するが、それは多くの目的地の候補の一つにすぎないものになった。1970年代には私のささやかな蔵書の約4分の1を占めていた「東洋」の書籍は、現在では数パーセントになり、数百冊、実際には数千冊の非東洋書籍の間に埋もれている。しかし、私は今でも時々上の方の「東アジア」の棚に手を伸ばし、そこにあるウクライナ語訳の本をすべて覚えている。清少納言、夏目漱石、有島武郎、芥川龍之介、谷崎潤一郎、川端康成、安部公房、三島由紀夫、大江健三郎、村上春樹。誰かの名前を忘れていないといいのだが。

私の旅仲間たちは、文化的アンダーグラウンドから他の都市、外国、さらには別世界へとさまざまな方向に移動した。私は彼らの多くを直接知っていたが、全員ではなかった。これは組織化されたネットワークではなく、むしろ、目に見えない形で国中に枝分かれした菌類、キノコの菌糸体だったのだ。しかし、私はあの環境にいたほとんどの人を、その声、態度、文章によって大体認識できる。彼らは通常、究極の真実や過激な判断から距離を置き、モノローグよりも対話、話すことよりも聞くことを好み、自分の発言を新しい議論や反論に対して開かれたものにしてることが多い。単純に言えば、陰と陽の微妙なバランスを感じ、その揺らぎや移り変わりを観察している。それは正式な入会式のないフリーメーソンのようなもので、同じ本を読み、同じ映画を観て、同じイメージを楽しむ人々の想像の共同体である。アウトサイダー、アウトプレイヤー、アウトシンカーの兄弟団だ。ソヴィエト・システムが

生み出した多くの奇妙なものの中で、これは最も注目すべきで、おそらくは最も長く続いたものの一つである。

私はこの兄弟団の一員であることを誇りに感じ、旅を続けられることを幸せに思っている。

## 2.

日本については本や映画で十分によく知っていると思っていたので、到着時にカルチャーショックを受けるとは予想していなかった。実際に私はショックを受けなかったが、悪魔はたいがい細部に宿る。札幌の私たちの宿舎に自分のスリッパを持って来た配管工は、とても面白かった。これまで自分のスリッパを持って私たちを訪問した人は誰もいなかったからだ。しかしそれよりも当惑させられたのは、街路やその他の公共の場所にゴミ箱がないことで、安全上の理由から当局がゴミ箱の撤去を余儀なくされた欧州の一部都市でのテロ攻撃の憂鬱な日々を思い出させた。同じような悪い暗示が日本の救急車によっても呼び起こされた。救急車の中には、空襲警報に似た非常に奇妙なサイレンを鳴らしているものがあったからだ。これは今のウクライナではすっかり慣れた音だが、心理的に快適とは言えない。

日本人が自分たちの国を非常にきれいに保っていることは知っていた。ゴミ箱をどこにも必要としないのは、ポイ捨てをしないからだ。1998年にサッカーの世界カップがフランスで開催され、日本から来たファンが試合後に観客が残したゴミをすべて集めるためにビニール袋を持ってスタジアムに参加したときの面白い話を思い出す。百聞は一見に如かずだ。ほとんどの細部は印象的で魅力的であり、いくつかは不可解ではあるが少々不便さという規模を超えるものではなかった。左側通行、数え切れないほど多くのゼロが付くお金、夏時間と冬時間が変わらないこと、キリストの生誕ではなく天皇の即位の年から数えられる暦など。

札幌で私たちが遭遇した唯一の本当の不便は、主要なサービスすべてにおいて英語の標識と英語を話すスタッフが不足していることだった。しかし、この問題さえも、いつでも人助けの用意がある、少なくとも助けようとしてくれる地元の人々のフレンドリーさによって、かなり相殺された。市役所で登録用紙に記入できなかった時、大学の同僚が同行して迷宮を通り抜けてさせてくれた。医師の診察が必要な時は、市のボランティア組織が通訳を提供してくれた。コーヒーを買いたいのに銘柄を選べなかった時、スーパーマーケットの女性数名が来て相談チームを組み、最後は近所のカフェから英語が話せるバリスタを呼んで、問題を解決してくれた。私は、店内にあるすべてのコーヒーの微妙な違いについて無料レクチャーを受けるという特典をもらった。

場合によっては、私が尋ねた目的地まで、札幌の人が物理的に案内してくれることもあった。彼らの多くにとって、その場所への行き方を説明するよりも、その場所まで送る方が簡単だった。そのため、彼らは時に、自分がそこに行く必要がないにもかかわらず、尋ねられた場所に私を連れて行ってくれた。一度、全く夢のような場面もあった。東京で妻と一緒に空港に向かう途中で電車を乗り換えそこね、飛行機に乗り遅れそうになった時のことである。横浜を通過した時、何かがおかしいことに気づいた。現地の地理に関する私のささやかだが非常に役に立つ知識は、私たちが目的地から遠ざかりつつあることを暗示していた。私たちはすぐに電車を降り、外にいる人々にアドバイスを求めた。「エアポート」という言葉は国際的で理解可能だったようだが、他のすべての言葉はそうではなかった。すると突然、中年



の女性が私たちについて来るように言った。彼女は私たちの前を走り、下りたり上ったりトンネルを通ったりしながら、数分後に空港行きの直通列車が出発するホームに私たちを連れて行った。彼女は電車を指さすジェスチャーをし、それからまた私たちを急がせるジェスチャーをしたので、私たちは荒い呼吸をしながら謙虚にありがとうをつぶやいて、そのまま電車に飛び乗った。そしてその時初めて、女性自身はその電車に乗る必要がなく、ただ私たちを助けるために一緒に走ったのだということを理解した。

すでに人生の大部分を生きてきた私は、でこぼこの道で何が起こっても、最終的には良い方向に向かうことを学んだ。すべての雲には希望の光があり、すべての欠点には何らかの利点があり、その逆も同様である。したがって、人生のアートとは本質的に、価値と利益、義務と制限、可能なことと望ましいことの間、困難なトレードオフを管理することに関わるのだ。多くの博物館やその他の場所で英語での説明が欠如または不足していることは、一方ではしばしばいらだちのもとだったが、他方で、私が訪れる対象についてウェブサーフィンをして基本的な事実を事前に読むことを促すという意味では、明らかな利点を感じさせた。したがって、都市や国、人々について、展示のキャプションだけに頼るよりもはるかに多くのことを自動的に学ぶことができた。

私は文化や歴史に対するごく素人的な興味に加えて、地理についてのかかなり詳しい知識を活用できた。子供の頃、私はおもちゃをほとんど持っていなかったが、そのおかげで、代わりの娯楽をいくつか発明することができた。そのうちの一つは、父親によって勧められたもので、一種の地図製作だった。彼は私に、どこかの大陸を見て覚え込んだうえで、すべての国とその首都を含めて紙に再現するという作業を課した。グーグルとインターネットの時代になった今、この知識はやや時代遅れになっているかもしれないが、自分がどこにいるかを学ぶ習慣は変わらずに残っている。どこに行っても、私は地図を見て、町とその構造、主な行き先についての知識を得るようにしている。それによって、自分が多忙な人生の主人であるかのように、確信と自信を感じることができる。

私の地理への関心のおかげで、たとえば、札幌は多くの人が信じているほど北ではないという見方など、面白い発見をすることがよくあった。実際、札幌は北緯43度線上、つまりソフィア、ビルバオ、フィレンツェの緯度に位置しており、どう考えても北の都市ではない。そして北海道全体は、ほぼエウパトリアとイスタンブルの間の黒海のレベルに位置し、キウおよびウクライナのほぼ全土より南にある。確かに、ヨーロッパ人が大西洋のメキシコ湾流から得られる無料の暖房はない。この太平洋はそれほど気前よくはないのだ。そしてもちろん、すべての認識は相対的なものだ。九州や四国、さらには本州の温和な気候のところに住んでいて雪もめったに見ない日本人にとって、北海道は本当に「北の領土」のように見えるかもしれない。プロヴァンスの住民にとってのリールやルアン、アメリカ人にとってのカナダと全く同じである。固定観念も影響する。ベルリンやウィーン、あるいはワルシャワを訪れる時でさえ、私は現地での話し相手に、キウの冬は多かれ少なかれ彼らの国と同じであり、ノヴォシビルスクはもちろんモスクワの冬とも明確に違うということを説明する必要がある。この場合、固定観念はおそらく地理的というより政治的なものであろう。

私の好奇心はしばしば実を結んだ。さまざまな国から来ているスラブ研の同僚たちに、円山への絵のように美しい小道や刺激的な三岸好太郎美術館、北海道開拓の村のすばらしさ、小樽の最高の場所や、札幌製糖工場がビールの精麦工場に、農学校が大学になったことな

ど、その場限りで情報を提供するのには本当に楽しいことだった。時には、大島渚の映画『少年』の北海道のエピソードに言及したり、スコセッシの『沈黙』と遠藤周作の原作小説を比較したり、あるいは市川崑の『ビルマの豎琴』や、同じく彼の作品で私が今まで見た最高の映画の一つである『炎上』について話したりして、日本側の



札幌オリンピックミュージアムにて

ホストさえも驚かせた。私は映画も文学も、歴史さえも専門ではないが、これらすべてのすばらしいことを偶然に発見した。それは純粋な好奇心であり、札幌のパシフィック・ミュージック・フェスティバルの創設者としてのレナード・バーンスタインや、京都を原爆投下から救った（長崎を犠牲にしてではあるが）と伝えられる米国陸軍長官ヘンリー・L・スティムソンについての物語の中に私を引き込んだこの場所と人々を、もっと理解したいという欲求であった。博物館の説明キャプションと観光案内冊子だけに頼っていたら、幕府によるキリスト教徒の迫害とその悲劇を記念する今日の厳粛な式典について、あるいはアジア太平洋戦争とロシア占領下の日本の北方領土、アイヌの文化と歴史、神道と仏教の共生・習合について、これほど多くを学ぶことは決してなかっただろう。

私が「補足読書」で発見した物語のいくつかは、オリンピック博物館に行く時に日本のオリンピック運動の歴史を簡単に概観して見つけたもののように、全く信じられないほどすばらしかった。2人の日本人選手が初めてオリンピックに参加したのは、1912年のストックホルムでの第5回大会であった。その一人はマラソン選手の金栗四三で、彼は何も勝ちとれなかったものの、試合中に失踪した最初の（そして今のところ唯一の）参加者として歴史に名を刻んだ。主催者らは大いに驚き当惑したが、ずっと後になって、彼が日本からの20日間にわたる体力を消耗する旅の後で完全に回復できていなかったため、レースの途中で気を失ったということが判明した。スウェーデン人の一家が道端で彼を助けてくれた後、彼はひどい恥を感じながらホテルに戻り、荷物をまとめて、自分の決定を誰にも知らせずに日本へ（さらに20日間かけて）移動した。

物語は1967年になって最高潮に達した。スウェーデンのテレビが彼を完走のために招待し、彼はそれに応じた。その時彼は75歳で、6人の子と、10人の孫がいた。彼は、54年8か月と6日5時間32分20秒という、塗り替えられることのない記録でマラソンの道を突破した。このすばらしい物語は単に面白いだけでなく、ためになるものでもある。ふくらんだ野心と傷つけられた名誉について、そして心を落ち着かせ、現実と折り合いをつけ、人生を肯定し、敗北後に最終的に勝利することについてのすてきな寓話として。理想的には、これはあらゆる優れた芸術作品のテーマであり、おそらくすべての良き人生が志すところなのだろう。

3.

しかし、私が日本、スラブ・ユーラシア研究センターに来たのは、想像上の「東洋」に若い頃に魅惑されていたためではなく、戦争と毎日の空襲警報や停電から逃れ、国際的な良い図書館にアクセスし、少しリラックスして、日ごとのサバイバルよりも研究活動に集中したいという、ごく世俗的な願望のためだった。私の研究テーマは、ウクライナと同国におけるロシアの戦争に対するスラブ研の広い関心と一致しており、この戦争に関する主要な国際的ナラティヴ、その背後にいるイデオログたち、そしてこの戦争がポストコロニアルの「グローバルサウス」と旧ソ連の中央アジアで引き起こした認知的不協和の研究を意味していた。

私は幸運にも、この分野の主要な専門家である宇山智彦教授と協力し、スラブ研の同僚と意見交換を行い、センターで開かれたいくつもの会議やセミナーにさまざまな役割で参加することができた。秋には、東京と関西への研究旅行のすばらしい機会に恵まれ、東京大学、慶應義塾大学、神戸学院大学で自分の研究を発表し、講義やセミナーで日本の同僚たちと生産的な議論をすることができた。これは、いくつかのすばらしい博物館や文化財・史跡を訪れる機会にもなった。『北方ジャーナル』のために私にインタビューし、最終的には現在の日本の政治と、日本の非常に重要で貴重なウクライナ支援の複雑さを明らかにする情報を提供してくれた岡野直氏には特に感謝したい。

昨年の早い時期に私は、日本がウクライナの世論の中で、最も友好的で最も支援に熱心な国の一つとして位置づけられていないことに、少し恥ずかしい思いをしながら気づいた。ウクライナのドナーリストでは、日本はEU、米国、ドイツ、英国、デンマーク、ノルウェーに次いで第7位である < <https://www.ifw-kiel.de/topics/war-against-ukraine/ukraine-support-tracker> >。ただ、日本は第二次世界大戦後の「平和主義」の伝統にいまだに制約されており、軍事援助を提供しておらず、これが残念ながら、何よりも絶望的な武器不足を懸念するウクライナのマスメディアにおける日本のイメージを損なっている。旧式の武器や弾薬を、多くの血を流しているウクライナに渡さずに処分するという日本政府の決定は非常にもどかしいが、この存亡を賭けた戦いでウクライナ側に立つ数少ない非西洋諸国の一つが日本であるという、一般に肯定的な見方を無にするものではない。戦争以前の経験も重要な役割を果たしている。日本はその文化によって、また伝統的な価値を否定したり傷つけたりすることなく西洋に追いつく近代化の模範的な方法によって、常に相当なソフトパワーをあふれ出させてきたからである。

ウクライナは今のところ、日本の市民の意識の中では新しい現象だ。あまりにも長い間、ウクライナは植民地支配者の影に隠れて目に見えず、あるいは帝国本国の「自然な」一部と



神戸学院大学にて  
(右から岡部芳彦教授、筆者、一人はさんで夫人  
のナタルカ・ピロツェルキヴェチ氏)

して単に同一視されてきた。遅ればせの解放は、多くの流血と信じがたいほどの人的損失を伴い、厳しい状況にある。しかし、ウクライナが新たに力説する政治的主体性は否定できないものとなった。ただし政治的解放は、文化的および認識論的な解放によって支えられるべきである。日本のアマゾンにあるウクライナ文化についての本が 10 冊にも満たないのは、元気を起こさせることではない。日本側とウクライナ側双方の相当な努力が必要であり、これを即座に変えることはできない。しかし、スラブ研や他のいくつかの日本の機関は、正しい方向へ正しい歩みをしていると感じる。そして、私はこのプロセスの目撃者、願わくは参加者になれることを嬉しく思う。

動き続けよう。

(英語から宇山智彦訳)

## 13年ぶりに北京を訪問して

田畑伸一郎（北海道大学名誉教授）

スラブ・ユーラシア学の大学院卒業生で、人民大学に勤める劉旭さんの招待により、5月12日から1週間、北京と上海を訪れました。中国は、2016年にハルビン、2017年に深圳などにも行きましたが、北京は、2011年のICCEES東アジア大会以来で、13年ぶりとなりました。この13年の間に中国は目覚ましい経済成長を遂げる一方で、日本は経済停滞が続いたので、自動車に象徴されるような経済発展という観点からは、日本は中国に完全に抜かれたなというのが第1印象でした。

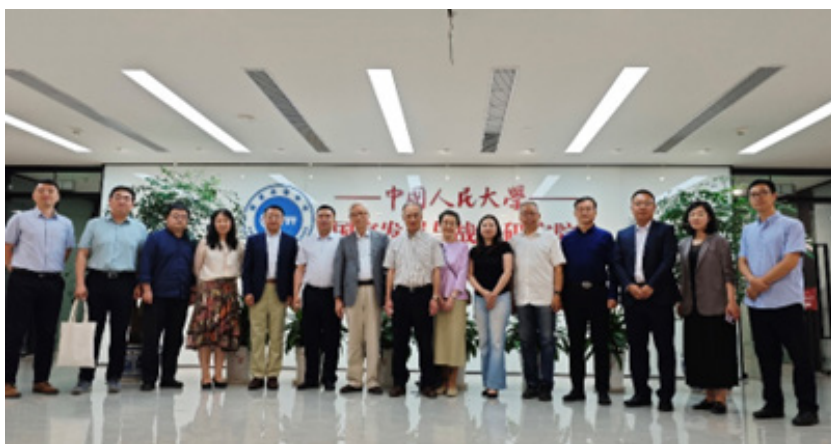
やはり卒業生で、ハルビンで勤めていた封安全さんも駆けつけてくれ、頤和園や北海公園を案内してくれました。人民大学国家発展・戦略研究院で開催されたセミナーには、劉さんや封さんの他にも、スラ研に縁のある経済関係の研究者が集まってくれました。なかでも、私がスラ研に赴任した1986年に、スラ研にとって中国からの最初の外国人研究員となった陸南泉さんと会えたことは、大変嬉しいことでした。彼は既に90歳ですが、論文を書いたり、政府に意見を述べたりして、現役で活躍されているということで、感服するばかりでした。1986年当時は、中国で最も優れたソ連経済学者としてスラ研が招聘したわけですが、故佐藤経明先生や毛里和子先生にも非常に高く評価されていました。私から見ても、その後、陸先生を超えるようなロシア経済研究者は中国には出てきていないような気がしています。

他にも、2010年の外国人研究員だった馮玉軍（Feng Yujun）さんや、2017～2018年にスラ研に4カ月ほど滞在された尚月（Shang Yue）さんなどもセミナーに参加してくれ、その後の懇親会も含めて、私にとっては同窓会のような雰囲気でも、大変楽しい時間を過ごすことができました。こうした皆さんは、スラ研での楽しかった思い出や、スラ研に対する感謝の思いを口々に語られました。私1人がお礼の対象になってしまったのは心苦しいところもあり、この記事を書いている次第です。やはり、外国人研究者との交流は、スラ研にとって宝だと思いました。

上海には、スラ研と縁の深い上海外国語大学の楊成（Yang Cheng）さんが招いてくれました。上海は私にとって初めてだったので、これもよい旅行となりました。院生相手の講義を2回ほどしましたが、中国の若者と話をする機会ができて、私にとってよい経験となりました。

丁度私が上海にいた頃に、プーチンが北京を訪問しました。私は、以前は、ブランド志向のロシア人は中国の自動車など見向きもしないだろうと思っていましたが、街中を走る中国の立派な車を見ると、今では中国車がロシアの新車販売台数の4割以上を占めるようになってきていることも、何の不思議でもないと思うようになりました。中国が本気でロシアを支え始めたら、西側はロシアに勝てないだろうと思いました。一方で、北京でのセミナーの際に、ロシアからの天然ガス輸出を増やすためのパイプライン（シベリアの力2）建設計画に関連して、これが純粋に経済の観点から中国にとって利益があるのかと質問したところ、利益にならないという返事が返ってきたことにはほっとするところがありました。ただ、その後、中国人同士で議論があったようで、意見は割れているようでした。

言うまでもなく、中国ではロシア人研究者との交流が以前と同じように続いているので、日本のロシア研究者が中国とより密接に交流することは、双方にとって大きなメリットがあるように思いました。



北京でのセミナーの後の記念写真

## 高田和夫先生を偲ぶ

松井康浩（九州大学）、岩下明裕（SRC）

2024年3月13日午後、高田和夫先生が自宅に近い、福岡の病院で亡くなられた。行年77歳であった。先生は九州大学在職中の後半から病を患われていたが、『近代ロシア社会史研究：「科学と文化」の時代における労働者』（山川出版社、2004年）及び『近代ロシア農民文化史研究：人の移動と文化の変容』（岩波書店、2007年）の出版を皮切りに、『ロシア帝国論：19世紀ロシアの国家・民族・歴史』（平凡社、2012年）、『帝政ロシアの国家構想：1877-78年露土戦争とカフカース統合』（山川出版社、2015年）を退職後に上梓するなど、晩年に一層、輝きをみせた研究者であった。高田先生は若い頃、俺は死ぬまでに三冊の専門書を出すと常々口にしていて、三部作という括りが適切かどうかかわからないが、「労働者・農民・帝国」が三本柱だとすれば、最後の二作をひとつとカウントできる。先生はきちんと約束を果たされたが、ご研究の本格的な評価については、より専門の近い方に譲りたい。



ところで先生から頂いた著作に改めて目を通すと、帝政ロシア期の社会や文化の精緻な研究をもとにロシア帝国に切り込む深い問題意識が伝わってくる。先生の持ち味は、ものごとを論じるにあたり、二元論や単純な枠組、いわばステレオタイプなものを見方を乗り越えようとするこだわりがあったように思う。理論的なフレームを嫌う先生の著作の冒頭は、政治学者にとっては真逆ともいえる、「ああでもない、こうでもない、これも違う」といった思考のうねりで満ちている。先生に育てられてきた私たち2人が間近に見た「高田和夫」本人もそうであった。

先生は、1946年9月15日生まれ。東京外大ロシア語学科から東大大学院社会学研究科に進み、和田春樹先生に師事したことで知られる。ただ課程が国際関係論であったことから、およそ専門のロシア史とは異色の「国際関係論」担当助教授として、33歳で九州大学教養部六本松地区に赴任する。

先生が赴任した初年度、1979年に九州大学法学部に入学したのが、いわば高田門下生の1期生ともいえる私、松井康浩である。教養課程にはクラス担任が配置され、松井が割り振られたL1-7クラスの担任の一人が高田先生だった。通常、最初のクラスの集まりに来て、自己紹介の挨拶でもすれば、担任の役割は終わる。だが着任したばかりの若き高田先生は学生を惹きつける磁力をもっていた。新入生のアクティブな連中10人ほどが先生の周りに集い、先生をチューター（親分？）に自主ゼミが立ち上がる。そこに偶然誘われ、以後、40年以上「足抜け」できなくなったのが松井だ。

ひと月に一回程度、後にはより緩やかに集まり、ロシア・ソ連関係の論文や本を輪読した。最初に読んだのは *Slavic Review* に掲載されたシリャブニコフ（労働者反対派）に関する論文だったと思う。もっとも力点は勉強よりも会の後の飲み会にあった。ゼミ活動において最も記憶に残っているのが、北アルプス縦走ツアーだ。10人程度のゼミ仲間が、ボスに叱咤されながら1週間の登山を敢行。今であればこんなにリスクある非公式イベントを学生に実践させる教員はいないだろう。先生の豪放磊落の端緒たる姿だと思う。先生のナカースにより、富山に降りた後の宿の手配は松井が行った。



↑ 日本アルプス挑戦  
(左から2番目が松井)



青春の群像 (左から松井、高田) →

高田教養部ゼミのいわば二期生が1982年に同じく九州大学に入学した私、岩下明裕であった(こちらは当初、自主ゼミではなくカリキュラムに沿ったもの)。岩下にとって入学後、前期に受けた授業「国際関係論」は衝撃だった。テーマが坂本義和ばりの平和学や米国のレーガン戦略であったのも驚いたが、「ああだ、こうだ」とうねる語り、時折叫ぶ「なんだ、ばかやろー」。先生がロシア史の専門家だとはつゆも知らなかったが、いつしか魅せられていく。

後期になると当時、流行していた「五つの共産主義 (マルチネ・熊田亨)」を題材にするなど本性が出る。ロシア革命を熱く語り、やたらトロツキーの写真をみせたがる。この出会いがなかったら、私はソ連の研究などしなかっただろう。ゼミでは高田平和学の主導のもと、沖繩へと旅行する。当時、飛行機は高すぎて、多くのゼミ生は往復とも博多湾から那覇までフェリーに乗った。南部戦跡ツアー、名護のオリオンビール工場見学など中身の濃い旅であったが、先生の挑発により、文集まで作ってしまった。世に出たばかりの巨大なワープロ (富士通) を打つため、先生の研究室にみんなで通ったものだ (当時は親指シフトなるものがあった)。ちなみに先生のこの系譜の仕事が『現代世界と平和』、『国際関係論とは何か』、『新時代の国際関係』の法律文化社三部作といえる

岩下はソ連に興味を持ち、1984年冬、モスクワ留学中の先生を追いかけて最初の海外旅行の地としたのが、その後の人生の導きとなる。



さて松井が学部進学した後も1期生の自主ゼミは続いた。確か3年生の頃、各自が「論文」を書くことになった。内田健二「ノメンクラトゥーラ制度の側面」(『思想』)を読んだ松井はソ連の特権層をテーマとした。報告をした松井に対し高田先生は、机の上に、フィッツパトリックのあの本(*Education and social mobility*)を放るようにドンとおいた。「お前これを読んだのか!」。松井にとってのフィッツパトリックとの出会いであった。その影響で松井は若者の運動や、「上からの革命」論に対して下からの運動(つまり、自発的にスターリニズムを形成しようとした人々の動き)に関心をもち、大学院への進学を考えるようになる。やがて学部にあがった岩下と松井が出会い、岩下は松井と共にソ連史の勉強を続ける。当時の岩下のゼミ論文のテーマは「ソ連共産党第10回党大会」であった。

そのようなとき高田先生が突然、ソ連東欧史研究(福岡)なるものを立ち上げた。第1回の研究会は1985年7月西南学院大学で開催(後に鹿児島大学に赴任する木村朗が報告。以下、基本的に敬称略)。きっかけは、東京から上垣彰が福岡に赴任し、研究会の開催を提案したことだ。当時、福岡近辺にはそれなりの数の研究者が集まっていた。経済の佐藤芳行(九州産業大学)、歴史の尼川創二(山口大学)、国際政治の定形衛(大分大学)らに加え、松永裕二(西南学院大学)、山口崇、永田萬享(ともに福岡教育大学)といった教育学者がいたこともユニークだった。その後、外交史の横手慎二(佐賀大学)が加わり、福岡の研究コミュニティは「東京、札幌に次ぐ勢いがある」とされた(あくまで高田談)。研究会の最初の成果が、1991年に刊行された高田和夫編『ペレストロイカ：ソ連東欧圏の歴史と現在』(九州大学出版会)である。

実際、研究会は幹事を上垣、松井とタッチしながらも、2016年まで250回近くつづき、高田先生のイニシャティブにより、関西の藤本和貴夫、中国(広島)の富岡正一、林忠行らを巻き込み、年一回の西日本地区ロシア東欧史研究者集會を三地区持ち回りでやるまでになった(総計25回)。



ロシア研修の頃



研究会での合宿

大学院生になった松井と岩下は高田先生が創った研究者コミュニティで鍛えられていく。当時はいまと違い、九州での研究生活は、東京を中心とした学界と結びつくことが容易でなく、良く言えば、ユニークな、悪く言えば、独りよがりな内向きの方向性を示すことが多かった。そんなとき高田先生はいつも私たち2人を九州外のコミュニティに連れ出そうとした。その代表的な例が、1989年夏のソビエト史研究会、岩手の八幡平合宿であった（内田健二主宰）。松井と岩下も報告したこの研究会は当時、東大を中心に活躍を始めようとしていた同世代との邂逅となった。高田先生も顔を出し、わんこ蕎麦競争などにも参加したが、発言は一切、なかった。「松井、岩下も大変だよな、親が付き添いで」と誰かが言ったのを覚えている。付言すれば、松井は以前にも「付き添い」されている。修士論文を書き上げたばかりの頃、上垣の配慮によりソビエト史研究会（東京）で報告の機会を頂いた。高田先生はわざわざ来られたが、このときも何も言わなかった。

私たちのことをいつも親身に考えてくださった先生だったが、素振りを見せないようにされていた。シャイな方だったのだろう。「先生と呼ぶな」「弟子は自由にさせる」というのが口癖だったが、要は基本的に何もしない。先生は私たちの原稿を見ても、てにをはを直すだけ。指導などほぼなく、「あー」とか「うー」を繰り返すだけだ。岩下など、実質的には横手（先生）に研究の手ほどきを受けたうえ、修士論文に至っては上垣（先生）の指導に頼っていた。

やがて松井が香川に、岩下が山口へと就職する。ソ連解体まもないこの時期、高田先生はある場所で次のようなスピーチをしている。「ソ連・ロシア研究は新しい局面に入った。これまではああいふ国だから現地の研究者は自由に仕事ができず、その間隙を縫って私たちが仕事のできる余地があった。これからは違う。現地の研究者に負けない仕事果たしてできるか。松井と岩下にはそれを目指してほしい」。

メッセージはもうひとつ。

「いまだにロシアの脅威を語るステレオタイプが根強い。そろそろロシアに対する新しい見方を世の中に共有してほしい。学者もこれに貢献すべきだ。わかっているよな、松井、岩下」(1993年8月:福岡リーセントホテル)。

ロシアのウクライナ侵攻を見たいま、私たちは後者について自信がない。またロシアが再び「ものを言えない国」

になりつつある昨今、研究者はソ連時代を思い出しながら仕事をしなければならない、とも考えこんでしまう。

それでもステレオタイプを疑い、社会と向き合おうとする高田先生の唸りは、時代を超えて私たちの心に刻まれている。「ばかやろー、おまえらちゃんと研究してんのか」。先生の声がいまも聞こえる。



ソ連東欧史研究会懇親会（手前右が岩下）

岩下が2001年に山口から札幌へ移ることになった。岩下は福岡のコミュニティから離れることもあり、先生にスラブ研に移るとい話をなるべく訪ねて行く。先生はどうやら「岩下が悩みを持ち、困っている」と思ったようだ。博多駅そばの日航ホテルの寿司屋に来说った。ご馳走するつもりだったのだろう。だが話を聞いた先生は驚き、こういした。「それは心配だ」。「いや先生、大丈夫ですよ」。「バカヤロー、お前のことではない。俺が心配なのは他の連中だ、大丈夫か」。結局、寿司代は岩下がすべて払わされた。

その後、高田先生は2001年から2004年まで九州大学の比較社会文化研究科／学府（1994年に教養部を改組）の長を務めるとともに、数多くの弟子を育てていく。縁があつて、2007年に松井が福岡に戻り、2010年、高田先生の退職記念として、関係者や弟子たちを束ねた編著『20世紀ロシア史と日露関係の展望』（九州大学出版会）、『グローバル秩序という視点：規範・歴史・地域』（法律文化社）を刊行。高田先生が育てた弟子たちも若手とは呼べない年齢に差し掛かつており、先生の後年のご活躍については、彼らの筆にまかせたい。

振り返れば2006年、湯田温泉の維新ゆかりの地・松田屋にて先生の「還暦祝い」をした機会が、おそらく3人でゆっくりとした時間をともにした最後だろう。私たちがまもなく退職。先生の気持ちを理解できる年齢となった。そして若いころ、福岡で同じ時間を過ごした先輩方がひとりひとりと去っていく。でもまだ私たちは先生が創った福岡のコミュニティのスピリッツを忘れてはいない。

高田和夫先生、ありがとうございました。そして、さようなら。

追記）高田和夫先生は2000年代、長年にわたってセンターの運営委員を務められ、帝国論の研究会などでも少なからぬ貢献をしてくださったことを申し添えておきます。

## 木村崇さんと SRC

望月 哲男（北海道大学名誉教授）

日本ロシア文学会、ロシア史研究会、日本スラヴ・東欧学会（JSSEES）、ロシア・東欧学会、ICCEES 等々の学会でそれぞれ重要な役割を果たされ、センターでも共同研究と運営の両面で長期にわたって多大なご貢献を賜った木村崇京都大学名誉教授（センター名誉研究員）が、本年 4 月 27 日に満 79 歳で亡くなりました。

木村さんの表情豊かな顔と元気な声に、スラブ研でも学会の場でも接することができないと思うと、実に寂しい気持ちを覚えます。

SRC と木村さんとの縁は、おそらく筆者が知る以上に長いのですが、正式に SRC の構成員としての役割をお引き受けいただいたのはちょうど 30 年前、ソ連邦崩壊の少し後のことでした。研究面では、1994 年度から 2010 年度にかけて共同研究員（うち 1994 ～ 1998 年度は部門共同研究員、1999 ～ 2010 年度は特別共同研究員）を、2011 年度以降は名誉研究員をお務めいただきました。運営の面でも、同じ 1994 年度から 2007 年度にかけて運営委員（2006 ～ 2007 年度は拠点運営委員）をお願いしています。

つまりはスラブ世界の大きな変化を受けた「重点領域研究 スラブ・ユーラシアの変動」（皆川修吾代表：1995 ～ 1997 年度）に取り掛かろうとするときに参画をお願いしたわけで、木村さんはこの地域の研究の新展開を目指すセンターの取り組みにおいて、頼もしい助っ人と厳しい審判員の両方の役を果たしてくださいました。1996 年の点検評価に寄せられた文章では、SRC が小さな組織ならではの細やかな合意形成の努力によって果たしてきた従来の機能・役割を積極的に評価する一方で、今後部門が増えて組織が拡大した場合に、いかに部門間の合意を作り、さらに内外の組織や機関との連携を形成・維持していくかという、本質的な課題を提起されています。また、先立って点検評価を担当された川端香男里・西村可明両氏の発言を受けて、センターのような組織の宿命である専門性と学際性の両面での有機的進化について、個々の研究員の努力だけではない長期的なビジョンを求めておられます<sup>1</sup>。

木村さんは文学の専門家として、同じ重点領域研究で行っていた「文芸における社会的アイデンティティ」という新時代の文学を中心としたロシア文化研究にも、関心を寄せてくださいましたが、これに関しても、主旨は評価しながら、重要な批判的提言を寄せてくださいました。社会のアイデンティティを論ずる以上、ロシア人論・ロシア社会論への展開が必須であり、その際、知識人の世界観とは重ならないところの多い大衆の意識を無視すべきではない。「すぐれた文学作品」や「新傾向の作品」の研究だけでなく、サブカルチャー的なものを含むマスコミ文化、ポップアートのものにまで対象を広げていかなければ、一知半解に終わりがねないという指摘で<sup>2</sup>、これは短期間のプロジェクトではにわかに対応できなかったものの、その後の私たちの共同研究に確実に影響を与えました。

1 木村崇「センターへの評価と提言（2）」『スラブ研究センターを研究する』1996 年。 <https://src-h.slav.hokudai.ac.jp/center/tenken/1996/kimura.html>

2 木村崇「スラブ研究の未来—文学—」『スラブ・ユーラシアの変動：自存と共存の条件』スラブ研究センター、1998 年、151-153 頁。

もちろん木村さんの本領はこうした事後的なコメントよりも、むしろ共同作業の現場での生の声としての力にあり、一番その存在を感じたのはシンポジウムなどの議論の場でした。1994年度冬期シンポジウムにおけるウラジーミル・トゥニマーノフ教授（ロシア科学アカデミー・ロシア文学研究所）の報告「レスコフとロシア文学」に対するコメントが筆



京都でトゥニマーノフ教授と

者の印象に残っていますが、そこには、時代によって偏った扱いをされ続けてきたこの19世紀作家のテキストに対するトゥニマーノフ教授の真摯でフェアな解釈への敬意と、木村さん自身深い縁と思い出のあるロシア文学研究所の良質な香りを放つ（しかもカフカスとも縁の深い）優れた人文学者（*наш человек*）との、極東の地での幸福な出会いを喜ぶ気持ちがあふれていたように感じられます。ほかに1996年度冬期シンポジウムのエヴゲーニー・アニシモフ教授（ロシア科学アカデミー・ロシア史研究所）の「ロシアの帝國的思考の根源」、1997年度夏期シンポジウムのボリス・ミローノフ教授（同前）の「18世紀-20世紀初期のロシアにおける民族問題」といった国家意識・民族意識に関連したロシア論の場でも、文学・歴史・思想を時間・空間感覚と結びつけてとらえる木村さんのコメンテーターとしての本領が発揮されていた感じがします。今整理してみると、くしくもすべてペテルブルクからの外国人研究員との対話でした。センターはいろんな人を媒介にいろんな場所とつながってきましたが、木村さんを介したペテルブルグの人文学者たちとの親密なつながりも、とりわけこの90年代において大きな意味を持っていたように思います。

2000年度夏期シンポジウムのセッション『ロシアとアジア』——【アレクサンドル・ゲニス（ラジオ・リバティ「魂の写真：現代文学の東方戦略」）、スタニスラフ・ラコバ（アプハジア人文科学研究所「フレーブニコフとアジア」）、中村唯史（「90年代ロシア文芸誌におけるコーカサス」）】、および2006年度冬期シンポジウムのセッション『帝国の知：ロシアのオリエンタリズムとポストコロニアリズム』——【中村唯史（「文学と境界：ロシア文学におけるカフカス—O. マンデリシタムとA. ビートフの場合」）、ハーシャ・ラム（カリフォルニア大バークレー校「象徴のクロノトポス：ロシアとグルジアのモダニズムにおける文化交差的な差異」）、乗松亭平（「19世紀ロシア文学におけるコロニアル表象の条件」）、宇山智彦（討論者）】における、木村さんの「突っ込む」司会者ぶりも、強く印象に残っています。前者については、露文学会会長の中村唯史さんが、同会のウェブサイト生き生きとした思い出を書かれています<sup>3</sup>。

各地で開催されたICCEES東アジア大会の場での、韓国や中国の同僚たちとの活発なやり取りも、また記憶に残っています。

3 <https://yaar.jp.org/?p=2438>

SRC という「学際的共同研究」の場でお付き合いいただいたせいもあって、木村さんの仕事の専門分野を超えた広がりぶりにはとりわけ強い印象を受けてきました。論文「ロシア文学が「ゆりかご」で見た幻影」<sup>4</sup>を典型例とするカフカスを中心舞台としたロシア人の自己表象と他者表象をめぐる議論は、それ自体ご自身の基軸であるレールモントフ研究の応用編ですが、図式的に語られがちなオリエンタリズム論を文学テキストの解釈レベルで多方向から徹底検証するという点で、大きな時代的な意義を感じさせてくれました。国家・国民の自己表象と他者表象に関する研究は、ロシア文学の領域を越えて広がり、大黒屋光太夫の異文化経験に際しての「記号論的」な態度を論じたものから、二葉亭四迷のロシア観を題材とした比較ナショナリズム論、さらに境界研究の一環として書かれた日本精神史論「日本の近代化が必要とした「国民」 鑄造の型」などに至るまで、数々のチャレンジングな仕事に結びついています<sup>5</sup>。その一方で、ハルビン・ウラジオストクを語る会（雑誌『セーヴェル』）を主な舞台とした、極東における日本人の活動史に関するきわめて実証的な一連の研究も、我々の印象に残りました<sup>6</sup>。境界研究プロジェクトにおける岩下明裕教授とのコラボは間違いなく相互に大きな刺激となったと思われ<sup>7</sup>、そこから、ロシア艦によるボロジノ諸島（大東諸島）発見の古事を入りに、海洋の時代に遅れて参入した 19 世紀前半のロシアの世界イメージを、当時の海洋地図を参照しながら論じた、独創的な研究も生まれています<sup>8</sup>。

いくつかの仕事はまだ論じつくされておらず、開かれたままにも見えますので、元気でいらしたらそれぞれがどんな形に発展し、相互に関連付けられて大きな樹木に育っていったのかと、想像をたくましくせずにはいられません。またその一方で、現在のウクライナ戦争におけるロシア国家の思考様式や振る舞いに木村さんが極めて深い失望感を抱き、ロシアにまつわる様々なイメージや通念を自ら洗いなおす必要を口にされていたことも、忘れることができません<sup>9</sup>。

以上のようにわれわれは木村さんの仕事や活動から多大なものを享受してきたのですが、感謝の裏には反省もあります。大きな問題は上記のことの裏返しで、ポスト・ソ連の変動期に密な関係が始まったことから、ともすれば木村さんの研究の現代的応用や分野を超えた展

4 木村崇「ロシア文学が「ゆりかご」で見た幻影」木村崇・鈴木董・篠野志郎・早坂眞理（編）『カフカス：二つの文明が交差する境界』彩流社、2006年、255-282頁。

5 木村崇「比較文明論的大黒屋光太夫論の試み」『むらざ』12、1993年、28-38頁；木村崇「明治維新前後生まれの日本知識人がイメージしたロシア—二葉亭四迷と内田良平の場合—」下斗米伸夫（編著）『日ロ関係：歴史と現代』法政大学出版局、2015年、41-67頁；木村崇「第3章 日ロにおけるナショナリズムと初期相互イメージの共起的生成—同時代人二葉亭四迷とチャーホフの言説をてがかりに」五百旗頭真・下斗米伸夫・A.V.トルクノフ・D.V.ストレリツォフ編『日ロ関係史：パラレル・ヒストリーの挑戦』東京大学出版局、2015年；木村崇（ディスカッション）「日本の近代化が必要とした「国民」 鑄造の型」『境界研究』9号、2019年、59-89頁。

6 木村崇「浦潮日本娼家生成過程解明への手がかり」『セーヴェル』20、2004年、12-21頁など多数。

7 岩下教授による木村さんのあふれかえるような思い出の記は、国境地域研究センターの次のサイトでご覧いただけます。[http://borderlands.or.jp/Remembering\\_Mr.%20Kimura.pdf](http://borderlands.or.jp/Remembering_Mr.%20Kimura.pdf)

8 木村崇「境界なき空間—時代的事象としてのボロジノ—」『境界研究』2号、2011年、1-29頁。

9 木村さんがこの戦争から受けた衝撃、あるいは「恥辱感」は、次の書評の冒頭によく表れています。木村崇（書評）「沼野充義・沼野恭子・平松潤奈・乗松亨平（編著）『ロシア文化 55のキーワード』ミネルヴァ書房、2021年」『ロシア語ロシア文学研究』54、2022年、131-142頁。

開の部分にのみ目を奪われ、研究の根幹にあたる19世紀前半の文学研究、とりわけレールモントフ研究の仕事について、きちんと注目し、学び、論ずるのを怠けてきたことです。このたびの訃報に接して、宇山編集長から追悼記事執筆のご提案を受け、ふと自分は木村さんの仕事について何を知っているのだろうかと振り返ってみて、そのことが実感されました。そして遅ればせながら自分用に木村さんの著作リストのようなものを作り（木村さんご本人はそういうことにあまり熱心ではなかつ



札幌の居酒屋で親しい仲間と

たのか、結構大変な作業でした）、代表的なレールモントフ論に目を通して見て、そこにある明晰で、精緻で、かつ情熱に満ちた世界に感動しました。

未完の散文長編『ワジム』の創作史上の位置と意味を稿本研究によって検討しながら、悪魔的主人公と反乱農民との二つの「復讐」の間の不協和音を析出していく論考<sup>10</sup>、戯曲『仮面舞踏会』の検閲・改訂のプロセスをたどりながら、作中の社会批判的な含意や、プーシキン夫妻をめぐるスキャンダルへの暗示を読み取り、人間の尊厳の擁護という深層テーマを見出していく論考<sup>11</sup>、連鎖小説『現代の英雄』の執筆順をめぐる議論に踏み込んで、主人公ペチョーリン像と語り手像の形成過程という角度から、説得力のある結論を導いた論考<sup>12</sup>——こんなふうにあげていけばきりがありませんが、木村さんの仕事は、立論の背景説明や資料・方法論の提示が明確なばかりか、これを論じることで何を解明するのかという目的設定がはっきりしています。作品の複数の稿や版の比較検討という地道なテキストクリティークの作業も、原典の確定に終わるのではなく、作品のモチーフや人物像の形成過程の内側からの解明、作者の個人的な経験や時代背景に照らしたその外側からの意味付け、作品をまたいだテーマの継承・発展のあり方の分析へと展開し、究極的には作者の創作を貫く構想や意図の推定へと結びついていきます。結果として、ポスト・デカプリスト時代の重圧のもとで自由を求めつつ短い生涯を終えた、早熟で誇り高き詩人のリアルな像が、立ち現れてくる気がします。

19世紀から1970年代までのレールモントフ関連文献約2000点を、7項目に分類して収録した『レールモントフ文献目録』（1981年）<sup>13</sup>も（もちろん全体にはとても目を通せませんでした）、間違いなく矚目すべき仕事で、序文にはレールモントフ研究の専門家を日本に増やして研究のレベルアップを図りたいという希望が、はっきりと刻まれています。ソ連

10 木村崇「ワジムの悪魔的性格」『中京大学教養論叢』17（3）、1976年、719-759頁。

11 木村崇「戯曲『仮面舞踏会』—作者の構想の表層と深層—」（上・下）『中京大学教養論叢』18（4）、765-789頁、1978年；19（1）、101-171頁、1978年。

12 木村崇「『タマーニ』論争」『ロシヤ語ロシヤ文学研究』11、1979年、1-14頁。

13 木村崇「M. Ю. レールモントフ関係類別露文文献目録」『中京大学教養論叢』21（3）、1981年、563-813頁。

科学アカデミー・ロシア文学研究所での一年弱の滞在研究の成果ですが、インターネットどころかワープロもなかった時代だったこと一つを考えても、その仕事の熱と迫力が伝わってきます。

このような仕事に見られる自由で可能性に満ちた詩人レールモントフへの敬愛は、旧ソ連の文学研究を徐々に支配していった権威主義的な作品解釈への反発と、表裏一体となっています。『さよならむさくるしいロシアよ』という短詩の原テキストをめぐる論考<sup>14</sup>では、ソ連科学アカデミーの重鎮ヴィノグラードフの定説を、複数の版の比較検討の手を抜いているとして正面から覆し、同時にロシア・ソ連の言論界における「民衆(ナロード)」という概念の、曖昧さゆえの呪縛力に警鐘を発しています。さらに叙事詩『ムツィリ』を論じた論文<sup>15</sup>では、レールモントフがロシア帝国によるグルジア併合を歴史的に不可避かつ必然の、正しい現象とみていたというソ連・レールモントフ学の伝統的な見解が批判され、またバラード『論争』をめぐる論文<sup>16</sup>では、東西文明の間に立つロシアの使命への積極的な承認をレールモントフに押し付けようとするソ連の「文化帝国主義的史観」の悪弊が、複数の優れた研究者の惜しむべき迷妄をあげつつ批判されていて、こうした一連の仕事が、90年代以降のオリエンタリズムをめぐる議論の基盤になっていたことがわかります。

なお、ヴィノグラードフの定説を批判した1982年の論文の末尾には、SRCの先輩で同じく優れたレールモントフ研究者だった出かず子さんによる北大所蔵資料提供への謝辞が述べられていて(所属は「北大スラブ研究所」と書かれていますが)、このころから木村さんとSRCは研究レベルでつながっていたのだと、うれしい気持ちで認識した次第です。

前記の「反省」に戻れば、90年代の共同研究の場でも、ここに一部例示したような木村さんの仕事の中核部分にまでさかのぼって議論の俎上にあげていたら、また別の「現代ロシア文化研究」が展開できていたかもしれないと感じた次第。もちろんそれは過去の仮定の話だけではなく、これからの現実的な課題でもあるのでしょう。

このような雑駁な振り返りで木村さんの研究の何が概観できたのかは分かりませんし、そもそも遠隔地に住むちょっと年齢差のある後輩の目に映ったプロフィールを書いてみたに過ぎないので、木村さんにふさわしい追悼文になっているのかも疑問です<sup>17</sup>。もしもご本人の目に触れたりしたら、君の話は相変わらず思い付きと材料ばかりで分析も結論もあいまいだと、夢枕に立って一喝されるかもしれませんが、それはそれでまた、うれしいような気がします。

\*編集部注：センターのウェブサイトには、この追悼文と合わせて、望月先生が作成された木村先生の著作リストを掲載していますので、ご覧ください。

[https://src-h.slav.hokudai.ac.jp/center/essay/2024070502\\_j.html](https://src-h.slav.hokudai.ac.jp/center/essay/2024070502_j.html)

14 木村崇「『定説』に対する異議—『さよなら、むさくるしいロシア』の原テキストについて—」『中京大学教養論叢』22(3), 1982年, 635-697頁。

15 Такаси КИМУРА. Грузинский вопрос в поэме М. Ю. Лермонтова «Мцыри» // *Japanese Slavic and East European Studies*, vol. 3, 1982, pp. 57-72.

16 木村崇「レールモントフのバラード『論争』の争点」『中京大学教養論叢』27(3), 1986年, 689-723頁。

17 木村さんのご経歴についてはSRCにかかわること以外触れていませんが、それについては上掲の中村唯史、岩下明裕両氏の追悼文をご参照ください。



# 学界短信

## 総合地球環境学研究所国際ワークショップ参加報告記

2024年3月7日～8日、京都の総合地球環境学研究所（RIHN）にて、国際ワークショップ“Multi-disciplinary and Inter-regional Perspectives on Environmental History: Towards Comparative Study between Europe and Japan”が開催された。筆者は、日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究（S）「ミレニアム大気再解析プロダクトの創出」（研究代表者：芳村圭（東京大学））のプロジェクト研究員として、自らが担当する環境史分野の研究に関わるこの国際会議に出席した。このワークショップは、日本とヨーロッパの環境史の専門家が一堂に会し、環境史の分野横断・地域横断型のアプローチについて議論するものであった。日本とヨーロッパの気候・歴史・文化に対する理解を軸に、異なる時代・地域の気候・環境変動と社会変動について比較・検討がなされた。問題意識の根幹には、現代の地球環境問題がある。

ワークショップは、研究所所長の山極寿一氏の挨拶で始まった。山極氏は、学際的な研究アプローチの進展を必須のものとし、急速な人口増加、温室効果ガス排出量の増加、地球規模の気候変動、熱帯雨林の減少など、人類に差し迫った課題に取り組むためには、協働研究が必要であることを強調した。また、これらの問題を解決するためには、より実社会に寄り添った考え方を取り入れることも重要であると述べた。

続いて主催者である中塚武氏（名古屋大学）が、本ワークショップの目的を紹介した。中塚氏は、人間と環境の相互作用に焦点を当て、急激な環境の悪化や資源の枯渇といった環境問題に対する新たなアプローチとして、そのような変化に対する社会の適応に注目している。中塚氏は、水田耕作に重要な日本の夏の気候の復元など、古気候データ（木の年輪、セルロースの酸素同位体など）と文献資料とを比較した研究の事例を紹介した。彼のアプローチは、まず気候データを収集し、次にそれを歴史事象と比較することで、社会が気候変動をどのように防ぎ、あるいはそれにどのように適応してきたのかを考えようとするものである。日本の3000年の歴史を対象としたこの研究は、時間的にも地域的にもま

7 March (Thu)	
09:00-09:15	Opening Remark - Purpose of workshop Takechi Nakatsuka
09:15-09:30	Introduction of RIHN Makoto Tamiguchi
09:30-10:00	Historical climate adaptations in Japan: Multi-decadal variability as a key factor activating societal regime shifts Takechi Nakatsuka
10:00-10:45	Regions as social-ecological systems: integrated approach to crisis and growth in late medieval and early modern Macedonia (Greece) Adam Izbelski
10:55-11:30	Integrating tree-ring data with historical documents related to rice yields during the early modern period in Japan Masaki Sano
11:30-12:00	A tree-ring perspective on climate and history Ulf Büntgen
13:30-14:00	The relationship of the environmental analysis and the studies on protohistoric social changes in the Japanese archipelago; on the topics of the beginning of early rice agriculture, the development of social complexity and the state formation process Kunihiko Wakabayashi
14:05-14:40	Reconstructing the East African Monsoon during the Roman Era (30 BCE to 300 CE): Assessing Governmental and Social Reactions to Shifting Nile Flood Patterns in Egypt and the Empire Sabine Huebner
14:55-15:30	Demographic and social transformation in ancient Japan Katsunori Imada
15:30-16:00	A Time of Troubles? Environment and Disaster in the 4th century eastern Mediterranean Lee Mordechai
16:05-16:40	Social Responses to Climate Change and Environmental Problems in Medieval Japan Toshikazu Ito
16:55-17:30	Infrastructure and institutions of food security in the context of short-term climate impacts in 13th/14th c. Italy Martin Bauch
17:30-18:05	A quasi-continuously age-determined and decadal resolved pollen record from Lake Suetsugu, Japan for 8-25ka (100% complete) and 35-48ka (60% complete): implications for palaeoclimatology and archaeology Takechi Nakagawa (Video participation)
18:00-21:00	Welcome Dinner @ Dining room of RIHN
8 March (Fri)	
09:00-09:35	Early Modern Japan as an Arena for Examining the Socioeconomic Impacts of Climate Change Yasuo Takatsuki
09:35-10:15	Climate and the 17th Century Crises in Swedish Kingdom Heli Huhtamaa
10:25-11:00	Population Data and Research in Premodern Japanese Society: Fruit from Historical Demography Miyuki Takahashi
11:00-11:35	Colonisation in eastern Europe as an ecological revolution: historical and environmental perspectives Piotr Gussowski
13:00-13:35	The Climate of Japan in All Seasons Reconstructed from Daily Weather Descriptions in Historical Documents Since the 17th Century Mika Ichino
13:35-14:15	A creative crisis? The 1770s anomaly as a catalyst of change in Europe Domènec Collet
14:15-14:45	The rhetoric of "ohayashi", a forest possessed by "daimyo" as feudal lord, in 19c Japan: Introduction of a former RIHN project on human-culture relationships in Japanese archipelago Hirotaka Terashima
15:00-16:45	General Discussion
16:45-17:00	Closing remark - Summary of workshop Adam Izbelski

Contact  
nakatsuka.takechi@rihn.jp / mail.nagoya-u.ac.jp

だ十分に統合されていないものの、過去の事例を現代の問題解決に応用すべく、一般的なモデル構築への模索が続けられている。

中世学者で環境史家のマルティン・バウフ氏（ライプツィヒ東欧歴史文化研究所）は、13～14世紀のイタリアについて、イタリアの都市国家の都市人口に焦点を当て、穀物を安定供給する上での為政者の役割に言及した。イタリアは小麦への依存度が高いため、食糧リスクが常に存在していた。バウフ氏は、収穫、気候変動、食糧不足の連環を研究し、複数地域にまたがる大飢饉に注目した。彼は、特にイタリアとエーゲ海北部の飢饉期間と高山の降水量の関連性に関して、古気候データの質の向上が必要であると指摘した。危機時の食糧供給を安定させるために、穀物輸出禁止、罰金、財産没収などの規制措置がとられた。1346年から47年にかけての飢饉は、多雨とブドウの不作によって悪化していく。飢饉を克服するための営為のなかには、クリミアにあったジェノヴァとヴェネチアの植民地からの大規模な穀物輸入も含まれていた。バウフ氏の研究は、歴史的な食糧危機における気候、統治、経済政策の複雑な力学に関する洞察であり、現代社会のレジリエンスと持続可能性の議論にもつながる。

佐野雅規氏（国立歴史民俗博物館）は、日本の米の収穫高に関する史料と年輪記録の統合について議論した。佐野氏は複数の樹種の年輪の酸素同位体比研究の有効性を強調している。佐野氏の研究は、日本の4354年間に及ぶマスタークロノロジーの作成、本州の北部と中部の比較、炭素同位体を用いた対比からなるものであった。また、平城京のような遺跡から出土した木材を使用することにも重点が置かれている。年輪の酸素同位体比データを分析した結果、「中世気候異常（1000～1300年）」の乾燥期と「小氷期（1400～1900年）」の湿潤期という対比関係が明らかになった。こうした分析を通じて佐野氏は、徴税文書と稲作への気候の影響とを結びつけた。

中川毅氏（立命館大学）の、福井県水月湖での20年にわたる堆積層調査は、湖底の厚さ45メートルの年縞を、正確なコアリングと放射性炭素年代測定によって年代測定の世界基準とした。さらにこの年縞の分析は、亜氷期/亜間氷期における人類の生活環境の変化にも示唆を与えるものであった。人類が植物の栽培化に成功した時代と、農耕を基盤とした集落の建設が始まった時代はいずれも、気候が比較的温暖で、しかも安定していた時期と一致していたのである。中川氏のチームは、迅速な分析が可能なポータブル花粉分析キットを開発し、グリーンランドの氷床コア研究に基づくダンスガード・オシュガー・サイクルに対応する変動を確認したものの、その変動幅は陸上においてきわめて小さかったことも明らかにした。

若林邦彦氏（同志社大学）は、日本の古墳時代（3～6世紀）の環境分析と社会の変化を分析した。彼は稲作と人口増加の複雑なダイナミズムに注視し、単純化された崩壊モデルに疑問を呈した。古墳時代の政治中心であった近畿地方においては、地方貴族の鍵穴型の墳が広く存在する。若林氏は、九州北部における稲作の普及について、気候の好条件による発展と、悪条件下での衰退との対比を論じた。稲作が東北に到達するまで400年、関東に到達するまでさらに長い年月を要したのはなぜか。弥生時代、村落は当初低湿地で繁栄し、弥生後期にあたる3～4世紀には丘陵地へと移行した。5世紀になると、集落は沖積扇状地に集中し、規模と人口密度が増加した。長期的な変化は気候の変化に影響され、社会的・文化的な反応は様々であった。若林氏は、環境と社会変化の分析に際してニュアンスを理解し、その機微を読み解く必要性を強調した。

ザビーネ・ヒューブナー氏（バーゼル大学）は、ローマ期エジプトの環境問題とその社会・経済的影響について議論した。彼女は、東アフリカのモンスーンがエジプトに与えた影響を重視し、ナイル川が農業に果たした重要な役割と洪水の歴史的意義を強調した。現代においても、エチオピアの青ナイル川の大エチオピア・ルネサンスダム建設はエジプトに水不足をもたらしている。ヒューブナー氏は、エジプトの気候変動と、播種期に影響を及ぼす洪水の遅れや不十分さに起因する農業の混乱とを関連づけた。穀物地帯であるエジプトを併合したことで、ローマ帝国は小麦やその他の農産物について高い生産力を得た。この生産力は、古代以来の灌漑設備とそれに基づいた税制システムに支えられていた。ヒューブナー氏は、火山活動とモンスーンのパターンを研究するために氷床コアのデータを用いた“The Roman Egypt Laboratory”プロジェクトの成果を紹介している。また、ハドリアヌスとピリッパス・アラブスの時代における税制改革を事例研究として取り上げ、洪水や疫病による社会の荒廃や公衆衛生の悪化に対するローマ帝国の対応を説明した。ヒューブナー氏は、ローマ政府の環境への対応と介入を解説し、環境ストレスの結果としての村落の衰退と土地の乾燥化を論じた。

今津勝紀氏（岡山大学）は、6～7世紀に焦点を当て、古代日本における戸籍と環境要因の交差について論じた。今津氏は、『日本書紀』や「倭」に関する中国の年代記に記されている、外国との戦争の影響を強調した。刀剣に刻まれた銘文や東大寺の正倉院文書からの知見は、社会構造や行政慣行についての理解を我々にもたらす。今津氏は、6世紀における30万枚の木簡と5千巻の仏典を紹介し、これが当時の人口増加と文化の発展を反映していることを指摘した。また、納税義務、性別、社会的地位などを詳細に記した戸籍について説明し、8世紀の日本では人口増加率が毎年約0.1～0.15%であり、増加人口は450万人にも達したこと、そしてそれが大規模な社会の変化をもたらしたことを述べた。事例研究の対象となった吉備地方では、社会変化のなかで朝鮮半島からの移住者による人口流入が顕著であったと考えられる。今津氏は最後に、世襲組織の形成や社会の進化における仏教の役割、環境と政治力学に影響された王権と行政構造の変化についてまとめている。

リー・モルデハイ氏（プリンストン大学／ヘブライ大学）は、ユスティニアヌスのペストや地震といった6世紀の災害が東地中海の貨幣流通に与えた影響について考察した。彼は経済の混乱を示す指標として、貨幣の重量と流通を分析した。地震やユスティニアヌスの疫病のような災害は、当初、帝国の打刻地や物流・経済に悪影響を与え、貨幣流通を混乱させた。しかし、モルデハイ氏の分析によると、こうした混乱は短期的で、多くの場合、回復と適応は迅速であった。アンティオキアのような都市の事例研究では、災害の貨幣流通への影響は様々であり、一次史料に記載されている深刻さを必ずしも鵜呑みにはできない。モルデハイ氏は、災害は短期的な混乱を引き起こしたが、長期的な影響は一般に考えられているよりも小さく、これは環境問題に対する古代社会のレジリエンスの高さを示すものであると結論づけられた。

伊藤俊一氏（名城大学）は、気候変動や環境問題に対する中世日本の対応を検討している。当時の武士や貴族の日記から、農民が地方や都の領主に年貢を納めるプロセスやその社会構造が明らかにされた。東寺の古文書、絵地図、水田の考古学的発見を用い、伊藤氏は中世日本の気候変動を分析し、気温が低下した時期（1355～1460年）と重なる6つの大飢饉に注目している。降水量データと社会の応答を関連付け、干ばつや洪水が、播磨国矢野荘のような荘園の年貢の支払いや農民の反乱にどのような影響を与えたかを考察した。伊藤氏は、

木材や木炭のための森林伐採が 15 世紀の洪水を悪化させたと結論づけ、中世日本においては気候変動と社会動態とが密接に関連していたことを具体的に示した。

アダム・イズデプスキ氏（マックス・プランク人間地球学研究所）は、ギリシアの中世後期および近世マケドニアにおける社会の危機と成長について考察した。残念ながらコロナ罹患のために来日がかねわなかったものの、本ワークショップの共同主催者としてイズデプスキ氏は、これらの地域の人間社会と生態系のダイナミズムを論じた。イズデプスキ氏は、花粉データとオスマン帝国期の文書記録を用いて、16 世紀に増加した人口が 17 世紀には減少するという人口の変動を描いた。また、ドイラン湖付近で穀物生産が増加し、それが環境の変化や社会経済的傾向と連動していることも指摘されている。イズデプスキ氏は、14 世紀の危機が気候や伝染病によって社会の成長を抑制した一方で、17 世紀には危機に適応した社会の再構築が見られ、この地域の回復力と柔軟性が示された結論づけた。

ウルフ・デュントゲン氏（ケンブリッジ大学）は、寒波に対する反応を週単位で検出する「ブルー・リング」を含む画期的な年輪解析技術を発表し、「古代後期小氷期」という造語についても紹介した。デュントゲン氏もまたオンライン参加となったが、彼の学際的なアプローチは、火山、気候、社会の結びつきを考察するものである。彼は、2000 年にわたる気温と降水量の逆相関と、その水文環境への影響について議論した。デュントゲン氏の研究は、氷床コアと年輪データを統合して火山噴火の人間社会への影響を分析するもので、火山噴火の気候への影響に関する新発見にも言及した。しかし、1345 年や 1453 年の噴火のように、いまだにあまり研究されていない噴火も多く残されており、それらの分析が持つ可能性についても触れている。

環境歴史会議の 2 日目も、日本およびヨーロッパを専門とする歴史研究者たちが、農業慣行、気候の影響、社会的な応答について、多様な視点から意見交換を行った。研究者たちはそれぞれの研究成果を発表し、環境史についての豊富データと、それを使って生態環境の動態をどのように理解するかについて議論を進めた。

高槻泰郎氏（神戸大学）は、日本の近世（1603～1867 年）における米の為替市場の複雑な仕組みについて報告した。高槻氏は、日本の近世経済において米が果たした極めて重要な役割を強調し、日記や商業文書などの史料が、価格設定や市場力学についていかに貴重な洞察を与えてくれるかについて詳しく述べた。例えば、『万相場日記』には、米、銀、その他の商品の日々の価格が丹念に記録されており、経済の動向や、政治的・自然環境的な出来事が農業生産に与えた影響を知ることができる。世界初の先物取引所である大阪の堂島米会所の設立は、日本が早くから高度な市場メカニズムを導入していたことを浮き彫りにした。

次にテーマはヨーロッパへと移る。ヘリ・フータマー氏（ベルン大学）は、17 世紀スウェーデンの農業危機における気候の影響について報告した。フータマー氏は、小氷期や火山噴火などの気候異常が、1601 年から 1603 年、1695 年から 1697 年のような飢饉の悪化に及ぼした影響を強調した。フータマー氏は、徴税データと気候データの綿密な分析を通して、中央集権的な行政と課税システムが、社会の回復と農業危機への対応に際して、どのような機能したのかについて説明した。質疑応答では、2 つの飢饉の違いや、危機の際の課税政策が社会に与える影響について質問が出た。

高橋美由紀氏（立正大学）は、前近代日本、特に江戸時代における人口動態と農業慣行について報告した。高橋氏は、文献資料から人口データを復元する際の課題と方法論につい

て解説し、日本の各地域における農業生産性と人口分布のシフトに光を当てた。フロアからは、農業社会の人的構成や、天明飢饉や天保飢饉のような飢饉が人口動態に与えた影響について質問が寄せられた。

ピョートル・グゾウスキ氏（ビャウイストク大学）は、中世の東ヨーロッパにおけるドイツ人の入植がもたらした生態系の変容について報告した。グゾウスキ氏の研究は、森林伐採や農業集約化を含む入植の実践が、ブランデンブルクやポーランドといった地域の景観や経済をどのように再構築したかを説明した。フロアからの質問は、ドイツの農業モデルを採用する動機と、これらの実践が環境に与える長期的な影響に関してであった。

市野美夏氏（国立情報学研究所）は、17世紀にさかのぼる気象記録から復元した日本の気候史に関する研究成果を報告した。市野氏は、詳細な記述を残す日記や公文書を用いて、日射量の変動と農業生産性（特に稲作）との相関関係を論じた。フロアからの質問は、文書資料から古気候を再構築するための方法論と、この成果を現代の気象パターンを理解するためにいかに応用できるのかということについてであった。

ドミニク・コレット氏（オスロ大学）の報告は、1770年代の危機のような気候異常がヨーロッパ社会に与えた社会経済的影響についてのものであった。コレット氏は、異常気象がヨーロッパ各地の農業生産性、経済の安定性、社会のレジリエンスにどのような影響を与えたかについて、環境危機に対する現代の課題や対応との類似性を示しながら議論した。質疑応答では、歴史事象を現代の環境政策へ適用することの可能性や、学際的な協力の手法について議論が深められた。

寺島宏貴氏（国立国語研究所）は、19世紀の日本における人間社会と森林の歴史的関係について、地域の認識や管理慣行を取り上げながら議論した。寺島氏は、日本の生物多様性保全と環境ガバナンスを理解する上で、文書資料と地元住民が有する知識が持つ意味について検討を行った。

本ワークショップの総合討論では、歴史的知見を現代の環境政策と実践に統合することの重要性について活発な議論がなされた。議論のなかでは、学際的な協力、データの共有、地球環境問題に取り組むための一般的なモデルの構築の必要性が強調されている。このワークショップは、日本とヨーロッパの人間社会と生態環境との相互作用を過去にさかのぼって探求するものであり、環境問題を理解し、それに対応するために、学際的な研究と過去のデータが重要な役割を果たすことを強調するものであった。[シャクマトフ]

（英語から諫早庸一訳）



全体写真

## 内陸アジア史学会主催シンポジウム 「モンゴル帝国史研究の現在と課題」参加報告記

2024年6月22日土曜日、早稲田大学において、内陸アジア史学会主催シンポジウム「モンゴル帝国史研究の現在と課題」が開催された。弊センターの「国際的な生存戦略研究プラットフォームの構築」プロジェクトも共催に名を連ねている。非常に刺激的なイベントとなり、今後のモンゴル帝国史研究の指針となる内容も多かったため、シンポジウム登壇者の1人として報告記をまとめておきたい。まず、会自体の規模であるが、対面・オンライン合わせれば200人以上は参加されていたのではないかという大規模なものとなった。

会場を差配して下さった内陸アジア史学会会長の柳澤明氏（早稲田大学）の挨拶に続いて、まずは小松久男氏（東京大学名誉教授）より趣旨説明があった。小松氏はこのシンポジウムの趣旨を、1) 研究の充実、2) 次世代への継承、3) 世界史教育への貢献の3つにまとめている。特に1) に関して、モンゴル帝国史研究は日本の東洋史学の遺伝子であるという言葉も出た。

次に、シンポジウムは個々のセッションへと入っていく。第1セッションは「チンギス・カンの実像」。最初の報告は宇野伸浩氏（広島修道大学）の「チンギス・カン研究と初期グローバル化としてのモンゴル帝国」であった。宇野氏は、岩波講座世界歴史第10巻『モンゴル帝国と海域世界——12～14世紀』の展望で自身が書いたチンギス興隆史の記述に沿って、チンギスの特に即位前に関しては、『元朝秘史』よりも『集史』に依拠すべきであると。さらにチンギスによる帝国の創設に帰結するモンゴル高原の統一にしても、それは当

初ケレイト王国を中心に進み、金朝がそれを支援したという岡田英弘氏の指摘を正当なものとして評価している。その次に宇野氏が強調したのが「初期グローバル化」である。モンゴルの興隆以前、すでにケレイト王国などにおいてキリスト教勢力が進出していた。中央アジアにおいてもイスラム化が進行しており、モンゴル以前にすでに西アジア文明を中心としたグローバル化が進展していたのである。モンゴル帝国の出現はグローバル化のプロセスのなかで起きたのであり、それを進めるイスラム勢力と手を組んで、それを加速させたものとして理解されう。

次に白石典之氏（新潟大学）の「考古学からみたチンギス・カン」である。この報告では、白石氏が20年以上にわたって発掘を行ってきたチンギスの拠点「ヘルレン河の大オールド」たるアウラガ遺跡についての研究成果が披露された。アウラガ遺跡に関わる大発見の1つが、鉄鍛冶の工房群であるわけだが、



ここでは鍛冶行程のみが行われていたというお話は意外であった。製鉄は山東や西夏の方でなされ、それがモンゴル高原にもたらされている。さらに鍛冶炉は火床の高いタイプで、これは北・中央アジアに起源を辿ることができる。つまりこうした技術は中国から伝わったものではないのである。さらに基壇を有し「チンギスの宮殿」と思しき第2建物に関しては、途中で設計が異なること、工人が変わり、在地の者たちから北中国出身の者たちに代わったことがうかがえるとのことであった。ただ石積みは前者の方がより丁寧であったことも指摘されている。

その後は第2セッション「ジョチ・ウルスとチャガタイ・ウルス」である。まずはジョチ・ウルス研究として長峰博之氏（小山高専）が「ジョチ・ウルス史の研究動向から：史料研究・考古学・貨幣学」の題で報告を行った。長峰氏はご自身の近年の研究に沿って、ジョチ・ウルスの「首都」であるサライの位置と、ペルシア語史料『ムイーン史選』におけるジョチ・ウルスの構造の認識について述べた。その前に、ジョチ・ウルス史研究の現在にも触れ、マリ・ファヴロ氏（パリ・ナンテール大学）の近著で、英語圏で強い衝撃を持って受け入れられている『オールド』<sup>1</sup>について、それが日本の研究を参照していないために惜しいと思う部分があるとも語った。サライをめぐる議論に関しては、移転の要因としてカスピ海の水位の上昇も考えられ、また議論の要諦の1つである貨幣発行地グリスタンの興隆とペストの関係が考えられるために、環境史研究の進展も重要であると指摘された。『ムイーン史選』に関しても、そもそも著者がナタンズイーであることにも疑義が呈されているという点に驚かされた次第である。「白帳」「青帳」の区別に関しても、それをより動的に考える必要があり、そうした区分が認識されるようになったのはおそらく14世紀の後半であるとのことであった。

同セッション、次の報告は松井太氏（大阪大学）による『『周縁』からみたチャガタイ＝ウルス：トゥルファン発現モンゴル語・ウイグル語資料を中心に』。近年そこまで新しい展開が政治史に関しては見られないチャガタイ・ウルス史研究であるが、モンゴル語で十数点、ウイグル語では数百点にも及ぶ行政文書の研究は、この30年で飛躍的な進展を遂げた。他ならぬ松井氏自身が、昨年に英語でウイグル文書の文献学的研究を上梓している<sup>2</sup>。30点ほど残るチャガタイ・ウルスの文書は13～14世紀にかけてのこの地域における通時的な変化を看取することを可能にする。こうした文書が他では見られない情報を伝えてくれる顕著な例の1つとして、チャガタイ・ウルスの「自称」が挙げられた。「中央モンゴル帝国（*Dumdadu Mongyol Ulus*）」、ラテン語史料に *Imperium medium* などとして現れるこの表現は、実のところ自称でもあった可能性が高い。さらに、ケベクは確かに「ケベク」と表記されている。チャガタイ家の王族たちは実際「ハン」を名乗っているなど、疑義有りとなされていた見方を言語学・文献学的証拠でもって糺していく松井節は健在であった。

その後、舞台はフレグ・ウルスに移り、第3セッション「フレグ・ウルスから見えるもの」となった。まずは大塚修氏（東京大学）による報告「モンゴル帝国時代ペルシア語歴史叙述研究の最前線」である。ペルシア語写本の涉獵・精査を研究のコアとする大塚氏はまず、これまでのフレグ・ウルス期を含むペルシア語の「史料概説」を刷新する必要性を強調した。概説自体が相互に参照されておらず包括的なものがないうえ、近年の文献学的研究の飛躍的

1 Marie Favereau, *The Horde: How the Mongols Changed the World*. Cambridge MA: Harvard University Press, 2021.

2 Dai Matsui, *Old Uigur Administrative Orders from Turfan (Berliner Turfantexte XLVIII)*. Turnhout: Brepols, 2023.

な進展が踏まえらるる必要がある  
のである。まずは近年、イラン国  
内を中心に陸続と出版されている  
新種の校訂本の数々が紹介された。  
例えば待望の『ワッサーフ史』校訂  
本も刊行された——ただし、ボン  
ベイ石版本を底本とするものであ  
るとのこと。さらに韻文や傑作集、  
百科事典といった、これまで必ずし  
も歴史研究に使われてこなかった  
諸史料も校訂本の刊行が進んでい



会場の様子

る現状がある。ただし校訂本を盲信することもできないこともまた、大塚氏の主張の根幹にある。校訂本そのものが良質ではないケースがままあるうえ、原著者自身が複数の版を残しているケースや、続編が書かれているケースなど、我々は依然として写本に立ち戻る必要が多々あるのである。『集史』やフレグ・ウルス宮廷など、「中心」を指定することのない史料研究の大切さも大塚氏の主張するところであった。

次に私の報告「フレグ・ウルスの崩壊：「14世紀の危機」の解明に向けて」が続いた。報告は2つのパートに分かれ、前半が環境史研究において必須となる文理協働について、後半が「14世紀の危機」についてであった。前半部に関しては、「14世紀の危機」のような1つのテーマに沿って扱う、アーカイヴス・学問分野・知識が、それぞれ根・茎・葉として1本の樹を形成するような学問樹をイメージするのが文理協働研究として生産的なのではないかと提案した。さらに環境史研究に関しては、複雑な人間社会と生態環境との関わり合いを見るモデルの1つとして、「崩壊学 (collapsology)」で提唱されている、気候変動⇒1) 生物・物理的影響⇔2) 生活・経済・健康への影響⇔3) 社会・人口変化⇔4) 適応と文化的応答、という4段階のフィードバックモデルを提案し、それを13世紀終盤のバグダードを対象にした環境史研究に適応させた。「14世紀の危機」に関しては、南中国から南インドへの海路を通じた疫病流行の可能性や、金銀交易の換算の固定化——試みに、それを「モンゴルの平衡 (Mongol equilibrium)」と呼んだ——による不況や、逆にインドを中心とした金銀価値の変動に起因する市場の混乱にも注意を払う必要性にも言及した。

最後のセッションは「元朝から広がる海陸交通路」、その最初は村岡倫氏（龍谷大学）の報告「最古の世界地図『混一疆理歴代国都之図』から見る内陸アジア」であった。村岡氏の所属する龍谷大学が所蔵する『混一疆理歴代国都之図』はデジタル工学に基づく復元により原型が忠実に復元され、残存する現物以上に解像度の高いデジタル画像を参照することができる<sup>3</sup>。1402年に朝鮮王朝で作成された同地図は、明からもたらされた李沢民『声教広被図』と清濬『混一疆理』の2つを基にしたとされており、両者が14世紀半ばに作成されているため、モンゴル・元朝時代の地名がそのなかに多く記されている。そのなかで村岡氏は、旧都カラコルムである「和寧」とならんで、「野馬川」、「稱海」という地名が重要な都市として円形で囲まれている事実に注目した。まず「野馬川」はモンゴルの大ハンの冬営地「オンギの離宮」があった地であり、シャーザーン・ホト遺跡に比定されている。この地はカラコ

3 <https://da.library.ryukoku.ac.jp/collections/kyourizu.html>.



ルムと漢地を結ぶ「モリン道」沿いにあり、古来交易の要地であった。「稱海」もまた、唐代からの回紇路上に位置し、アルタイを越え、中央アジアに至る交通路の要衝であった。したがってこの強調は、モンゴル時代あるいはそれ以前からの交易路の要地に付されたものなのである。

最後の報告は向正樹氏（同志社大学）の「混一疆理歴代国都之図から見る海域アジア」。海域アジア史を専門とする向氏は『混一疆理歴代国都之図』に関して、東南アジアが——陸塊としては——描かれていないことに注意を向ける。それはなぜなのか。例えば楊庭壁はマアバルおよびクーラムへの航海の際、3年連続で冬のモンスーンと直後の夏のモンスーンで南中国と南インドとを往復しており、マラッカ海峡はただ通過されただけの可能性がある。また、情勢不安により、当時の東南アジアの主要海湾都市において、モンゴルは拠点を築けなかった可能性もある。ただし、マルコ・ポーロが風待ちでサマラに5か月滞在了たという事実もあり、この点はまだまだ検討の余地があるとのことであった。向氏はさらに、モンゴル帝国史研究から海域アジア史像を刷新できる可能性にも言及した。宋代南海貿易史の劇的な進展は、いわゆる「朝貢」が上位権力による贈与に尽きるものでは必ずしもなく、そこに等価交換の事例も多く存在していることを我々に示している。これは既存の中国的朝貢モデルからの逸脱事例でもあり、従来の海域アジア史研究に再考を迫るものでもある。さらに他の時代との比較に関しては、複数ある「交易の時代 (ages of commerce)」に危機が挟まるサイクルとして海域アジア史を捉える見取り図も提示された。

個々の報告に続いて、総合討論の時間となった。総合討論では、予め設定された以下3つの論点を軸に議論が展開した。1) モンゴル帝国の特徴・特質は何か、2) モンゴル帝国史研究の有効な切り口は何か、3) モンゴル帝国史研究は世界史の理解、歴史教育をどう変えるか。それぞれの論点につき、興味深い議論が展開されたが、ここでは最初の論点に関わるものとして、昨年、海外と日本のモンゴル帝国研究史の到達点を示す、編著がそれぞれに刊行されていることに関して、私自身が述べたことを記しておきたい。それは *The Cambridge History of the Mongol Empire* と岩波講座世界歴史の第10巻『モンゴル帝国と海域世界——12～14世紀』である<sup>4</sup>。前者の序文で強調された「全体を見る眼 (holistic paradigm)」を日本のモンゴル帝国史研究者は目新しいものとして見るができない。それは岩波講座世界歴史の前シリーズ、第2シリーズの第11巻『中央ユーラシアの統合——9～16世紀』の総論において、杉山正明氏がまさに強調した点であるからだ<sup>5</sup>。ただしもちろん、この事実をもって、杉山氏や日本の学界が海外に先んじていたと言うことはできない。杉山氏は——そしてもちろん岡田英弘氏も——当時の海外の研究潮流に非常に敏感であった。相互に異なる伝統を有し、決して融合することはないにせよ、幾多の機会に交差し続けている海外と日本のモンゴル帝国史研究、この両岸を旅する必要が、まだまだあることを感じさせられる機会であった。[諫早]

4 Michal Biran & Hodong Kim (ed.), *The Cambridge History of the Mongol Empire* (Cambridge: Cambridge University Press, 2023); 弘末雅士 & 荒川正晴 (責任編集); 宇野伸浩 & 四日市康博 (編集協力) 『モンゴル帝国と海域世界——12～14世紀』(岩波講座 世界歴史 10) 岩波書店, 2023年。

5 杉山正明「中央ユーラシアの歴史構図——世界史をつないだもの——」杉山正明ほか [編] 『中央ユーラシアの統合——9～16世紀——』(岩波講座世界歴史 11) 岩波書店, 1997年, 3-89頁。

## 学会カレンダー

2024年	9月12-15日	CESS (Central Eurasian Studies Society) Fall 2024 Conference 於シラキウス大学 <a href="https://centraleurasia.org/cess-fall-2024-conference/">https://centraleurasia.org/cess-fall-2024-conference/</a>
	10月5-6日	ロシア史研究会 2024年度大会 於東京大学本郷キャンパス <a href="https://www.roshiashi.com/annual-conference">https://www.roshiashi.com/annual-conference</a>
	10月26-27日	日本ロシア文学会第74回全国大会 於創価大学 <a href="https://yaar.jpn.org/?p=2372">https://yaar.jpn.org/?p=2372</a>
	11月2日	2024年度内陸アジア史学会 於龍谷大学大宮キャンパス <a href="https://nairikuajia.sakura.ne.jp/SIAS/">https://nairikuajia.sakura.ne.jp/SIAS/</a>
	11月9-10日	ロシア・東欧学会 2024年度研究大会 於早稲田大学 <a href="https://www.jarees.jp">https://www.jarees.jp</a>
	11月15-17日	日本国際政治学会 2024年度研究大会 於札幌コンベンションセンター <a href="https://jair.or.jp/">https://jair.or.jp/</a>
	11月21-24日	ASEEES (Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies) 2024 Annual Convention 於ボストン <a href="https://www.aseees.org/convention">https://www.aseees.org/convention</a>
	12月18-19日	スラブ・ユーラシア研究センター 2024年度冬期国際シンポジウム 於SRC
2025年	7月21-25日	ICCEES (International Council for Central and East European Studies) XI World Congress 於ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン <a href="https://www.iccees2025.org">https://www.iccees2025.org</a>
	8月25-29日	XVIIIth International Congress of Slavists 於ソルボンヌ大学 <a href="https://mks-paris.sciencesconf.org">https://mks-paris.sciencesconf.org</a>

[編集部]

## 大学院だより

北海道大学大学院文学院人文学専攻スラブ・ユーラシア学研究室には新しい仲間が入り、下記のようなメンバーになりました。[岩下]

### 2024年度スラブ・ユーラシア学講座大学院生名簿

学年	氏名	研究題目	指導教員	副指導教員
D3	林 健太	ピョートル1世時代の官僚出版業と国家出版言語	長縄	青島 安達
D3	李 暢	日露中文化交流からみる19世紀末から20世紀中葉にかけてのハルビンのコスモポリタニズム	長縄	ウルフ 安達
D3	松元 晶	1960年代中央アジアの自己表象	宇山	安達 長縄
D3	鄭 米芝	競争的権威主義と体制の安定性：プーチン政権下のロシアを中心に	宇山	仙石 岩下
D3	王 雨寒	中国と中央アジアの文化交流に関する考察	宇山	長縄 岩下

D3	布日額	清朝末期モンゴルのナショナリズムと日露両帝国 (1900-1912)	宇山	ウルフ	長縄
D3	長島 徹	ロシアの国籍政策	岩下	宇山	服部
D3	上村 正之	1800-30 年代ロシア文学におけるコサック表象の変遷	安達	宇山	野町
D2	三栖 大明	戦後ソ連民族学におけるエトノス理論の展開：L.N. グミリョフを中心に	青島	宇山	安達
D2	金 盾	中国企業のロシア進出：自動車産業を中心に	服部	岩下	仙石
M2	井口 拓哉	スペイン内戦とロシアの対外政策	岩下	ウルフ	服部
M1	林 浩平	戦後ソ連におけるブルガリア人強制移住者の帰還	仙石	ウルフ	野町
M1	橋爪 真	西バルカン諸国における地域間協力	仙石	岩下	
M1	ソハル エルケンベク	トカエフ政権によるカザフスタン人意識の形成	宇山	長縄	
M1	鈴木 恵理	カザフスタンとクルグズスタンにおける政変後の政治	宇山	仙石	
M1	椎名 旺快	バトゥミ州のムスリム・ジョージア人を巡るロシア帝国の統治政策	宇山	長縄	
M1	池田 航輝	チャイコーフスキイの交響曲第 4 番における民謡の音楽的意味：ロシア音楽史の中での位置付けの試み	安達	野町	
M1	池田 伶音	ロシア民間航空機産業における産業政策：航空機リース制度を中心に	服部	岩下	大西
研究生	小太刀雄海	1880-1910 年代、トルキスタン総督府における綿花プランテーションの本格化について	宇山		

## 岳王嘉琳さんの滞在

蘭州大学大学院民族学専攻修士課程の岳王嘉琳 (Yue Wangjialin) さんが、2024 年 3 月末から 9 月までの予定で、特別研究学生としてセンターに滞在しています。センターでの研究テーマは「中国と中央アジアの国境地帯の社会発展についての研究：中国政府の「農村復興」戦略に基づく吉根郷の開発実践をもとに」で、新疆西部のクルグズ牧畜民の持続可能で多元的な生計の研究に取り組んでいます。吉根郷を含む中国各地でのフィールドワークと、中国国境地帯に関する概説の分担執筆の経験があり、研究の成果が期待されます。[宇山]

## 編集室だより

### Acta Slavica Iaponica

第 45 号は現在、投稿者による改稿が概ね完了し、11 本の投稿のうち 8 本を掲載できそうです。この 45 号の出版に向けた作業から、本誌は諫早庸一新編集長に引き継がれます。[長縄]

## 『スラヴ研究』

『スラヴ研究』第71号は7本の投稿のうち、以下の力作を掲載することになりました。現在、最終の校正作業が進行中です。

### [論文]

福原優策 欧州における記憶の政治：2019年欧州議会決議の分析

### [研究ノート]

三栖大明 L. N. グミリョフのエトノス定義と階梯的民族観

山崎ひとみ 千島アイヌ民族へのロシア正教会による宣教活動：露米会社植民地時代を中心に

丁寧な査読をしてくださったレフェリーの皆様に心より御礼を申し上げます。残念ながら今回の掲載が見送りとなった方も、次回以降の再挑戦をお待ちしております。

次の第72号の原稿締め切りは、2024年8月末の予定です。センターのホームページに掲載されている投稿規程・執筆要領等を熟読のうえ、締切厳守でご提出ください（事前申し込みは不要です）。海外からの投稿が相当数あることなども踏まえ、第71号からはプリントアウト版原稿の郵送を廃止し、PDF版とワード版のファイルをEメールでご提出いただくことにしました。電子ファイルの宛先は、[src.slavicstudies@gmail.com](mailto:src.slavicstudies@gmail.com)になります。

『スラヴ研究』は二名の専門家による査読と、数か月にわたる丁寧な原稿の改善・改定、編集作業を経た、質の高い学術論文の出版を目指しています。奮ってご応募ください！

[青島]

## 会議

### センター協議員会

2023年度第12回協議員会 3月5日～11日（メール開催）

1. 研究生の受け入れについて

2023年度第13回協議員会 3月21日（オンライン開催）

1. 教員人事について

2. 研究生の退学について

2023年度第14回協議員会 3月26～27日（電子投票）

1. 教員人事（特任助教）について

[事務係]

## みせらねあ

### 服部倫卓・吉田睦（編著） 『ロシア極東・シベリアを知るための70章』（明石書店）刊行

明石書店の「エリア・スタディーズ」のシリーズから、『ロシア極東・シベリアを知るための70章』が刊行されました。SRCの服部が共編者に名を連ねています。

ロシア極東・シベリアは、地理的にこそ広大ながら、今日この辺境地帯には全ロシア国民の2割ほどが住んでいるにすぎません。それでも本書はあえて、ロシアの東部に徹底的にフォーカスしています。それは、本書の「はじめに」に記したとおり、ロシアをロシアたらしめているのは、シベリア・極東なのではないかとの思いからです。シベリア・極東は、ロシアのすべてではないにしても、それがなかったら、ロシアはまったく違う国になっていたはずです。

本書では、このような問題意識に立ち、あえて辺境からの視点で、ロシアという存在に迫っています。

第I部：シベリア・極東の地理と自然、第II部：シベリア・極東の歴史、第III部：シベリア・極東の民族と文化、第IV部：現代のシベリア・極東の諸問題、第V部：シベリア・極東の諸地域という構成になっており、全70章と4本のコラムにより、シベリア・極東をあらゆる角度から語り尽くしています。[服部]



## 専任研究員消息

岩下明裕研究員は、3/21-3/23の間、研究会“Northeast Asia in Crisis: Thinking about the Relations between South Korea, Japan and Russia”出席のため、ソウル（大韓民国）に出張。また、6/10-6/12の間、IREEES (SNU)-SRC (HU) 第10回ジョイント・シンポジウム“Co-existence and Interdependence in Eurasia and East Asia”出席・報告のため、ソウル（大韓民国）に出張。

野町素己研究員は、3/23-6/2の間、研究打ち合わせ、資料収集、講演会での講演のため、コロンバス、シカゴ、ロサンゼルス（アメリカ）、トロント（カナダ）に出張。

服部倫卓研究員は、4/21-4/29の間、現地調査のため、キシナウ（モルドバ）に出張。

安達大輔研究員は、4/29-5/21の間、セミナー出席、研究報告、資料調査、研究打ち合わせのため、ニューヨーク、レキシントン（アメリカ）に出張。また、6/10-6/12の間、IREEES (SNU)-SRC (HU) 第10回ジョイント・シンポジウム“Co-existence and Interdependence in Eurasia and East Asia”出席・報告のため、ソウル（大韓民国）に出張。

[事務係]

## 目 次

研究の最前線	1
2024夏期国際シンポジウム「新世界の坩堝？ 20世紀夜明けのロシア境界地域」開催される／長縄宣博教授が大同生命地域研究奨励賞を受賞／博物館展示「北大の探求心2024」に参加しました／第10回日韓共催シンポジウムの開催／第66回北大祭研究所・センター合同一般公開「過去の記憶と現在（いま）：スラブ・ユーラシア」開催される／JCBS/UBRJ/RINGSセミナー『『しま』を考える：共同体の想像と協働』参加記／「東ユーラシア研究」プロジェクト（EES-SRC）主催・関連セミナー／ウクライナ国立ポルタワ教育大学との交流／専任研究員セミナー／研究会活動	
人事の動き	14
大須賀みか助手の退職／研究員・事務職員の異動	
第3回 マトリョーシカ・インタビュー	16
野町 素己 教授	
北海道での人生のアート（私の生涯にわたる旅からのいくつかのメモ）	22
by ミコラ・リャプチュク	
13年ぶりに北京を訪問して	29
by 田畑 伸一郎	
高田和夫先生を偲ぶ	31
by 松井 康浩、岩下 明裕	
木村崇さんと SRC	36
by 望月 哲男	
学界短信	41
総合地球環境学研究所国際ワークショップ参加報告記／内陸アジア史学会主催シンポジウム「モンゴル帝国史研究の現在と課題」参加報告記／学会カレンダー	
大学院だより	50
2024年度スラブ・ユーラシア学講座大学院生名簿／岳王嘉琳さんの滞在	
編集室だより	51
<i>Acta Slavica Iaponica</i> / 『スラヴ研究』	
会議	52
センター協議員会	
みせらねあ	53
服部倫卓・吉田睦（編著）『ロシア極東・シベリアを知るための70章』（明石書店）刊行／専任研究員消息	

---

2024年7月31日発行

編集	田宮彩也香、宇山智彦
発行者	長縄宣博
発行所	北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 060-0809 札幌市北区北9条西7丁目 Tel.011-706-2388、706-3156 Fax.011-706-4952 インターネットホームページ： <a href="http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/">http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/</a>

---